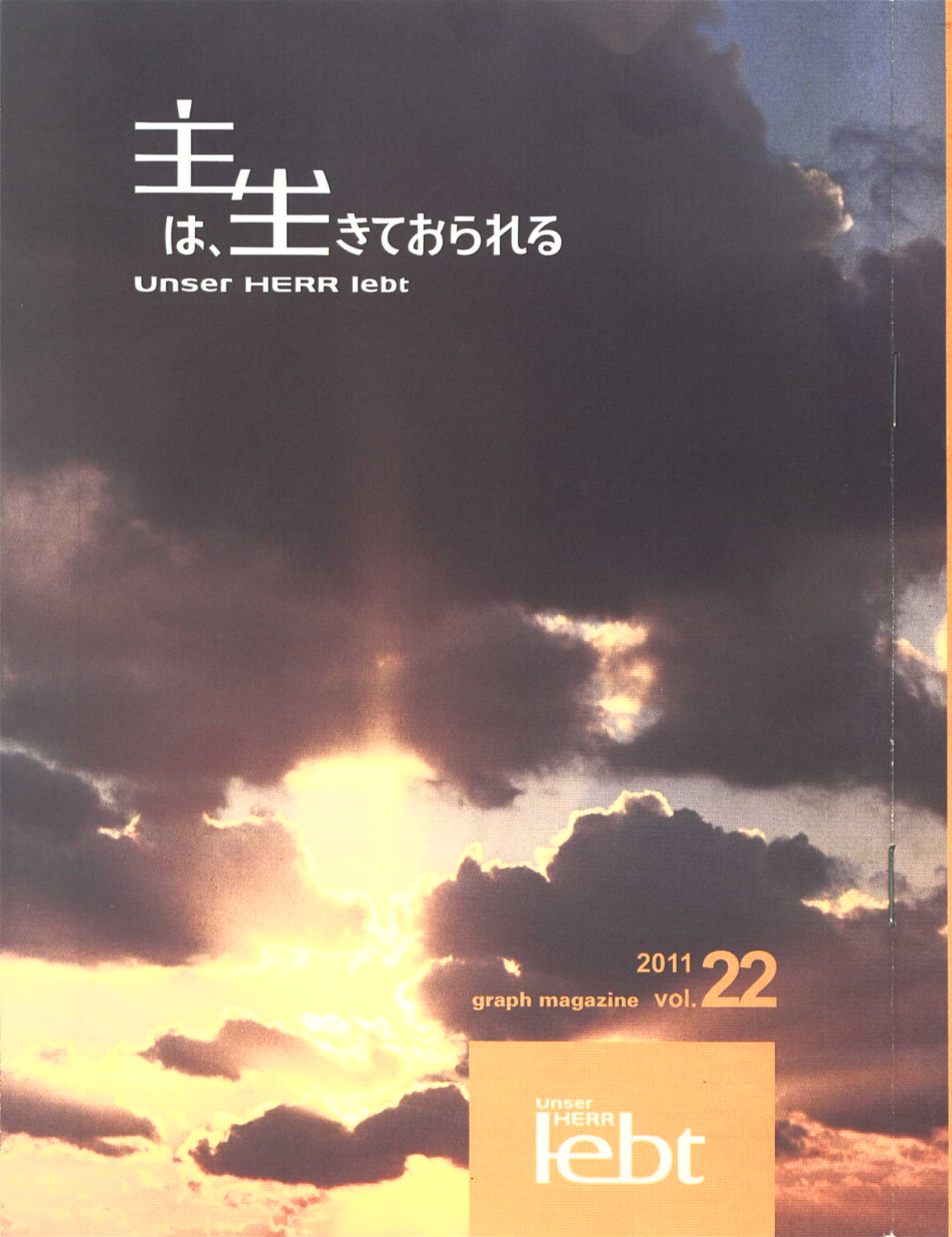
主は、生きておられる

Unser HERR lebt



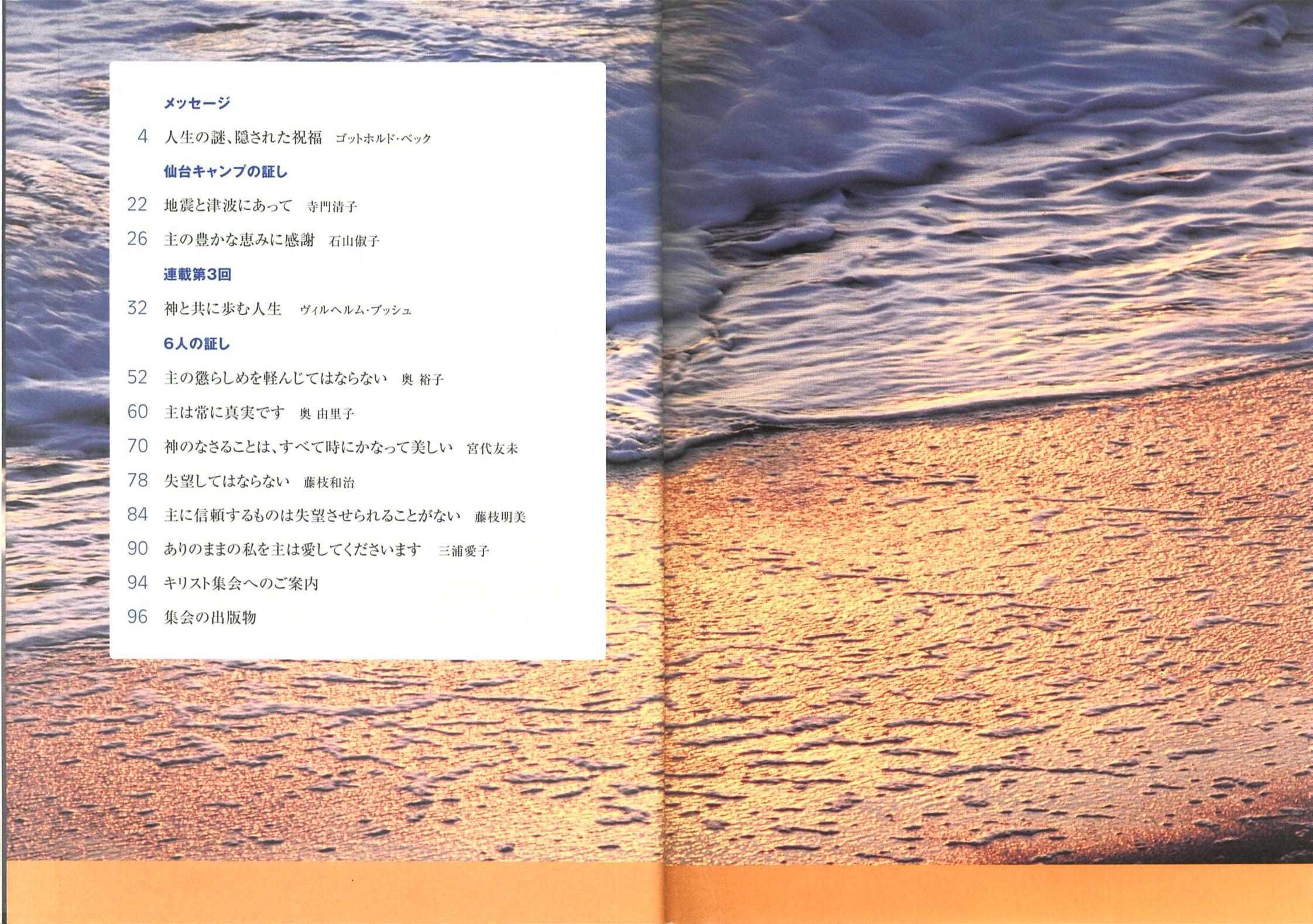
2011 graph magazine vol.22

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol.22 定価100円（本体95円）



メッセージ

4 人生の謎、隠された祝福　ゴットホルド・ベック

仙台キャンプの証し

22 地震と津波にあって　寺門清子

26 主の豊かな恵みに感謝　石山俶子

連載第3回

32 神と共に歩む人生　ヴィルヘルム・ブッシュ

6人の証し

52 主の懲らしめを軽んじてはならない　奥 裕子

60 主は常に真実です　奥 由里子

70 神のなさることは、すべて時にかなって美しい　宮代友未

78 失望してはならない　藤枝和治

84 主に信頼するものは失望させられることがない　藤枝明美

90 ありのままの私を主は愛してくださいます　三浦愛子

94 キリスト集会へのご案内

96 集会の出版物

人生の謎、隠された祝福

ゴットホルド・ベック

「強くあれ。雄々しくあれ。アッシリヤの王に、彼とともにいるすべての大軍に、恐れをなしてはならない。おびえてはならない。彼とともにいる者よりも大いなる方が私たちとともにおられるからである。彼とともにいる者は肉の腕であり、私たちとともにおられる方は、私たちの神、主、私たちを助け、私たちの戦いを戦ってくださる方である。」民はユダの王ヒゼキヤのことばによって奮い立った。（2歴代　32・7〜8）

人間は誰でも、人生においていろいろな問題、あるいは悩みや苦しみに出会うものです。そして多くの場合、私たちはどのように解決すべきか答えを見出すことができません。多くの人々が、山のような問題の前になすすべを知らず、悩んでいます。

ドイツ人で信仰を持つ一人の兄弟も、そのような経験をしました。彼は非常に豊かな財産に恵まれ、主イエス様のご栄光のためにすべてを捧げて生きていました。ところがある日突然、思いがけない出来事のため莫大な財産を失ってしまったのです。なぜそのようなことが起きたのか、いくら考えても人間的な思いでは分かりません。しかし、この兄弟はすべてがとられたとき、次のように言ったのです。「人はみな、必要なものを持つものだ。欲しいものを与えられることはないかもしれないが、必要は満たされる」と。

またもう一人、ドイツのアイドリンゲンの姉妹会の女性のことを思い出します。彼女は長い間、主イエス様にだけ仕えてきた敬虔な姉妹でしたが、急に脳出血で倒れて半身不随になり、一言も話せなくなってしまいました。

なぜこのようなことが起こったのか、誰にも分かりません。また、そこから逃れる道を見つけることもできず、半ば絶望的な状態に陥ってしまう、というようなことが実際にあります。

旧約聖書に記されているヤコブも、このような経験をした一人です。

父ヤコブは彼らに言った。「あなたがたはもう、私に子を失わせている。ヨセフはいなくなった。シメオンもいなくなった。そして今、ベニヤミンをも取ろうとしている。こんなことがみな、私にふりかかって来るのだ。」（創世記　42・36）

ヤコブはそれまでの人生で、主に信頼せず、自分の意志や力により頼んで行なったことがたくさんありました。長年、ずるがしこく卑劣な方法を用いて、ただ自分の利益を得ようと図ってきました。しかし、そのように人を欺く者が、人から欺かれることになりました。主なる神は罪を見過ごしにされないことを、ヤコブは厳しく教えられる必要がありました。「こんなことがみな私に降りかかってくるのだ」と言ったヤコブには、すべてのものが自分に歯向かっているように見えました。このようにすべてが失敗に終わったと思えるとき、私たちはどうしたらよいのでしょうか。

まず心に留めるべきことは、すべてが破たんしたように思えても、それは、ただそのように見えるに過ぎない、ということです。ヤコブの場合も、最愛の息子ヨセフは確かに今はいないけれどもいつかは必ず会える、シメオンもまた今はここにいないけれども、必ず会える日が来る、ということです。私たちが人間的なものの見方をしてしまえば、多くのことを正しく見ることができずに、すべてのものが自分に敵対しており、あらゆることが失敗に終わった、という思いに捕われます。

しかし、真実はその反対です。つまり、これらの事柄は私たちに敵対するものではなく、「私たちのために」あるのです。ところが、私たちの性質は、そのことをすぐには認識できません。ですから、ふりかかってきた困難は、実は「隠された祝福」と言

えるのです。どうしてそう言えるのか。ここからは、さまざまな困難が私たちに降りかかってくる理由、なぜ、何のために起こされるのか、について考えたいと思います。

その答えは三つあります。一つは「罪人が救われるため」、もう一つは「信じる者が変えられるため」、さらには「救われた者が用いられるため」です。

1罪人が救われるため

なぜ、どうして、何のために、と考えるとき、まず言えるのは「罪人が救われるため」に、主がそれらの出来事を起こるままにさせておかれる、ということです。大切なのは人間が真理の認識に至ること、すなわち主イエス様に出会うことです。どれほど多くの人々が暗中模索しながら、自分たちが真理を知らない者だという事実に気づかずにいることでしょ



うか。多くの人は救い主の必要性に対して盲目です。そのことを認めざるを得なくなったとしても、依然として逃げようとします。静まって、人生の意味や死後の世界を深く考えることをしたがりません。

ですから、次のように言うことは正しいでしょう。人間は救われる前に、いったん失われた状態にならなければなりません。つまり、人間は神様に救われる前に、まず、自分が失われた状態の者であることを認めなければならないのです。物質的なものが満ち溢れ、目に見えるものにがんじがらめとなってしまっているために、永遠のものや生きておられる神について深く考える時間がないのが現代の特徴です。これこそが、主が多くの不愉快なこと、困難なこと、理解することができないことを、私たちの上に来たらせる理由です。主の導きの目的は、ご自分のもとに引き寄せること、そして赦しと人生の意味を与えてくださることに他ならないのです。

次に、そのような二つの実例、二人の「放蕩息子」について旧約と新約聖書から見てみましょう。

一人目はマナセ王です。

彼(マナセ王)は、主がイスラエル人の前から追い払われた異邦の民の忌みきらうべきならわしをまねて、主の目の前に悪を行なった。…マナセはユダとエルサレムの住民を迷わせて、主がイスラエル人の前で根絶やしにされた異邦人よりも、さらに悪いことを行なわせた。主はマナセとその民に語られたが、彼らは聞こうともしなかった。そこで、主はアッシリヤの王の配下にある将軍たちを彼らのところに連れて来られた。彼らはマナセを鉤で捕え、青銅の足かせにつないで、バビロンへ引いて行った。しかし、悩みを身に受けたとき、彼はその神、主に嘆願し、その父祖の神の前に大いにへりくだって、神に祈ったので、神は彼の願いを聞き入れ、その切なる求めを聞いて、彼をエルサレムの

彼の王国に戻された。こうして、マナセは、主こそ神であることを知った。（2歴代　33・2、9～13）

マナセ王は主が語られたことばに聞き従おうとしなかったため、主はやむを得ず多くの苦しみを与えました。それしか彼を導く方法はなかったのです。それでマナセの身に、突然すべてが終わりになったように見えることが起こりました。ですから、それは偶然ではなく、背後に主が立っておられ、すべてを御手のうちに納めておられたのです。11節に「そこで、主は…バビロンへ引いて行った」とあります。このことでマナセ王はすべてを失った、というよりも、本当の終わり、つまり、主である神からの「逃亡生活」の終わりへと導かれました。このように主の導きの目的は、呪いや滅びではありません。永遠のいのち、救いにあずからせるために、心の目を開いてくださることです。12節、13節にあるように「マナセ王は悩みを身に受けたとき、…大いにへりくだって、神に祈ったので、神は彼の願いを聞き入れ、その切なる求めを聞いて、彼をエルサレムの彼の王国に戻された。こうして、マナセは、主こそ神であることを知った」のです。放蕩息子であるマナセ王は、多くの苦しみを通して考えられないほどに回復されました。

次に新約聖書に記されている放蕩息子を見てみましょう。

彼は父の家を出て行くとき、自信に満ちていました。何ものにも束縛されないで、自由に自分の人生を楽しもうと思い、意識して自分の選んだ道を行ったのです。――自分自身の道を行きたいと思う者に対しては、主は好きなようにさせます――しかし、最初はすべてのことが望み通りにうまくいくように見えても、やがて、すべてのことが思い通りに行かなくなるときが来ます。まもなくお金を使い果たし、それまで友だちと思っていた人からは見捨てられ、行き場を失ったのです。

何もかも使い果たしたあとで、その国に大ききんが起こり、彼は食べるにも困り始めた。それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって、豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。（ルカ　15・14～16）

しかし、この人生の深みへ導かれたことによって、彼は自分に立ち返ることができただけでなく、父の許へと戻ることになりました。そして、まことに満ち足りた幸いな人生へ入ることができたのです。

人生の途上には無数の困難が横たわっています。しかし、主はいつも一つの目的をもっておらます。それは、私たち罪人を零の点にまで低くさせること、自分に破産させることです。これが主のとられる方法であり、その限りにおいて、すべての人は自分自身の助けとなるものを失い、心から悔い改めることにより、また主を信じることにより、主なる神の御許へ行くことができるようになるのです。

人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか。」と言った。そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」（使徒　2・37～38）

今まで見てきたように、支配したもう主は罪人が救われるために、人間に正しい理解と悔い改めを得させるため多くのできごとを起こるがままにさせておかれるのです。

2信じる者が変えられるため

なぜ、どうして、何のために、と問うことについて、もう少し考えてみましょう。第二に、支配したもう主は「信じる者が変えられるため」にそれらの多くの出来事を起こるがままにさせておられるのです。

未信者だけではなく、信じる者もまた、いわゆる運命のなすわざを経験するのです。信じる者も同じように失望落胆し、なぜこんなことが起こるのか、どうしても理解することができない、という事態に遭遇します。なぜ主は、信じる者が厳しい試練に遭うことをお許しになるのでしょうか。それは彼らに主のいのちを注ぐためであり、聖めのためです。また、彼らが主の似姿に変えられるためでもあります。聖書からその例を読んでみましょう。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召



された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。（ローマ　8・28〜29）

私たちの人生の途上に横たわっているあらゆるもの、また私たちの人生の中に入り込んでくるものはすべて、主によって用いられており、従って無価値なもの、無目的なものは一つもありません。大切なことは、それらを通して私たちが造り変えられること、「主に似た者となる」ことです。

私たちの人生の中に偶然というものは何一つありません。すべての背後に主が立っておられ、主がそれぞれの場合に応じて適切な導きをなしておられるのです。「すべてが益となる」、このことを私たちはいつも新たに覚えましょう。

良きこと、いえ、最も良きこととは「私たちが造り変えられる」ことです。

そのために主の御手によって練られることは、ときには痛みを伴うことがあります。それは自らが砕かれることなしにはあり得ないことなのです。人はその時、失望落胆し、力を失い、自暴自棄に陥りがちです。しかしそれは、自分の思い通りにならないと腹を立て、目先のことしか考えられないためです。主は、信じる人々が御子の姿に似た者となるように、あらかじめ定めておられるのです。29節に「なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです」とあります。主が目指しておられるご目的は、何とすばらしいものでしょうか。この目的からいつも目を離さないでいることは非常に大切です。

あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことがありません。そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れています。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。

さらにまた、私たちには肉の父がいて、私たちを懲らしめたのですが、しかも私たちは彼らを敬ったのであれば、なおさらのこと、私たちはすべての霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。（ヘブル　12・3～11）

この聖句にあるように、霊の父は私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして懲らしめるのです。主はご自分に属している者を限りなく愛してくださいますから、まさにそのために、私たちを懲らしめ教育なさるのです。私たちの主は完全であり、導きもまた完全です。おそらく私たちはすべてを理解することができず、挫折しそうな危機に直面し、自己憐憫に陥る場合も少なくないでしょう。「すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます」（11節）。ここで大切なことは、そのときは悲しく思われても、一時的なものであり、結果的には幸いになる、ということです。

私たちは次のことを忘れないでいましょう。主はいつも、私たちの最善だけを考えておられる方であり、私たちは主である神様の最愛の子です。すべてが失敗に終わったとしても、私たちは主に愛されている、ということを知ることができるのです。まさに、主の試練や懲らしめこそ、「主の愛の証拠」です。今はそのことを理解できなくても、後になれば、そのことを主に感謝し礼拝するようになるでしょう。

次のようなダビデの告白も覚えておきましょう。

苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。し



かし今は、あなたのことばを守ります。（詩篇　119・67）

なぜ、何のためか、という問いの三つ目の答えを次に見ましょう。

3 救われた人が用いられるため

主を信じて「救われた人が用いられるため」、真実に主に仕える者となるために、主は、それらの多くのできごとを起こるがままにしておられるのです。

残念なことに、信仰を持つ人々の多くは、実を結ばない木のようなものです。主は彼らを用いることがおできになりません。その原因は何でしょうか。それは、彼らが「主に頼らなくても何とかやれる」と考えていることです。もちろん主を信じてはいますが、知らず知らずのうちにそう考え、実際には自分自身の力と知恵により頼んでしまうのです。確かに、多くの信じる人は主のために何かをしたい、主のために一生懸命ご奉仕したいと思って主に願いもします。けれども、結局は、自分がそれらのことをしたいために、主を利用してしまっているのです。

しかし、実は「主が」信じる者をお用いになりたいと思っておられるのであり、主が「ご自分の器」として彼らを用いたいと願っておられるのです。

永遠に残る実を結ぶご奉仕は、主のためにする人間の努力ではなく、主がなさるみわざでなければなりません。これこそ、多くの人々が私たち信じる者に逆らっているように思われたり、主が私たちを厳しく取り扱わなければならなかったりして、私たちが砕かれなければならない理由なのです。

ここで、短く二人の例を考えてみましょう。

●ペテロ

まずペテロです。自信と旺盛な独立心がペテロの特徴でした。彼は自分の能力に自信をもっていました。

「シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。しかし、わたしは、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

シモンはイエスに言った。「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。」

しかし、イエスは言われた。「ペテロ。あなたに言いますが、きょう鶏が鳴くまでに、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」（ルカ　22・31～34）

「シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました」（31節）、そしてイエス様はこのことに反対なさいませんでした。これは、ペテロにとってまことに厳しく辛いことでしたが、必要なことだったのです。ここの聖句で注意していただきたいのは、いろいろな人格の出てくる順番です。最初に「悪魔」、次に「わたし」すなわちイエス様、そして「あなた」すなわちシモン・ペテロ、および「兄弟たち」という順番になっています。主は、ペテロを通して他の兄弟たちを強めようと思われました。しかし、そのためには、ペテロは砕かれることがどうしても必要でした。そのために悪魔がペテロを攻撃することになるのです。そして、そのときにも主は絶えずペテロのために祈っていてくださいました。ですから、サタンは自分がしたい放題に何でもすることはできません。私たちは、完全に主の御手の中にいるので

あり、それは永遠の安全を意味します。主は、悪魔とペテロの間にお立ちになっておられるのです。

ペテロはこの後、イエス様のことば通り完全に失敗してしまいました。彼は最後の土壇場に立たされたのです。そこにはもはや一条の希望の光も射し込まず、すべての望みが消え失せ、まったく絶望的な状態がペテロを支配しました。しかし、この訓練はどうしても必要でした。ペテロはもはや自分の力により頼むことができなくなりました。そうして初めて主はペテロをお用いになることができたのです。そのよい例が五旬節ですが、そのときにペテロを通して三千人以上が救われたと聖書は言っています。

そこで、ペテロは十一人とともに立って、声を張り上げ、人々にはっきりとこう言った。「ユダヤの人々、ならびにエルサレムに住むすべての人々。あなたがたに知っていただきたいことがあります。どうか、私のことばに耳を貸してください。…人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか。」と言った。そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。なぜなら、この約束は、あなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くにいる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです。」ペテロは、このほかにも多くのことばをもって、あかしをし、「この曲がった時代から救われなさい。」と言って彼らに勧めた。そこで、彼のことばを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。

（使徒　2・14、37～41）

●パウロ

次にパウロについて少し見ましょう。パウロもペテロと同じように深みを通らされた後、命がけで主に仕える者へと変えられました。彼はキリスト者を捕縛するためダマスコへと向かう途中、主の御声を聞きましたが、その時強い光を浴びて目が見えなくなり、三日間暗闇の中に生きたのです。そのことを後になってパウロは次のように証しています。

何事かを自分のしたことと考える資格が私たち自身にあるというのではありません。私たちの資格は神からのものです。神は私たちに、新しい契約に仕える者となる資格を下さいました。文字に仕える者ではなく、御霊に仕える者です。文字は殺し、御霊は生かすからです。

（2コリント　3・5～6）

私たちはみな、実を結ぶ秘訣を知っています。すなわち自分自身を否定して、自分に死ぬことです。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。

（ヨハネ　12・24）

これまで見てきたように、多くの重荷にあえいでいる人、どんな逃れ道も見出せず、絶望的な状態になっている人がどこにもいて、どうして自分はこんなに多くの困難を経験しなければいけないのかと嘆いています。おそらくそれは第一に、その人がまだ救いの確信をもたず、主イエス様こそ私のかけがえのないお方であると言うことができないからではないでしょうか。第二にそれは、救い主が、その人をご自分に似たものに造り変えようとしておられるか

らではないでしょうか。大切なのは救われることだけではなく、聖められることです。第三に、それは、今までその人は主を利用しようとしていたけれども、今や主が彼を主の御手の中でご自身の器としてお用いになろうとしているからではないでしょうか。

「主は、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出し、燃える蛇やさそりのいるあの大きな恐ろしい荒野、水のない、かわききった地を通らせ、堅い岩から、あなたのために水を流れ出させ」（申命8・14～15）るお方です。人生の道を塞ぐ岩のような障害、乗り越えられない困難、私たちが甘受しなければならない心の痛み、これらのものから主は水を湧かせようとしておられるのです。このような経験を通して私たちは主の御許に行くのであり、このような人生の深みを通って私たちは祝福を受ける者とされ、またいのちを与えられるのです。「わたしを信じる者は、…その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる」（ヨハネ7・38）と聖書にはあります。

主イエス様を知らない人々は、悔い改めて主の御許に立ち返らなければなりません。救われるためです。主イエス様を知るようになった人々は、主のうちにとどまるため、また用いられる道具となるために悔い改めて立ち返らなければなりません。主イエス様のうちにとどまる者、主と結びついている者だけがこの命の泉の通りよき管となり、それを通して、主イエス様がご自分を現すことがおできになるのです。これらの過程は、鉄から鋼を造る工程によく似ています。それは非常な高温によってのみ可能です。同じように、主は不十分な人間を主のいのちに満ち足りた人間となすためには、多くの困難や試練を用いなければならないことを、よくご存じであられます。

今のこのときの試練は、まさに死後の世界に至る手前の準備期間のものに他なりません。主は、なにもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。…

ですから、私たちは勇気を失いません。たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。

（2コリント　4・8～10、16～17）

そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実をみのらせず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。しかし、私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。私の主、神は、私の力。私の足を雌鹿のようにし、私に高い所を歩ませる。指揮者のために。弦楽器に合わせて。（ハバクク　3・17～19）

のも御手から失いません。主は永久にすべてを支配なさるお方です。暗闇の夜にも困難の涙のときにも主の御手は私たちを守ってくださいます。失望落胆した心も慰められ、喜ぶことができます。なぜなら、主は永久に主であられるからです。そして主は決して過ちをおかされません。私たちには理解できないことがたくさんあるとしても、主は私たちにとってもっとも益となることを考えていてくださるのです。

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。（ローマ　8・18）

私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。いつで

地震と津波にあって

寺門 清子





津波で流されたものをご友人が道端で見つけて送られた写真

八年ぐらい前、松島の駅前で甥の近藤武夫兄弟に会い、キリスト集会のことを聞きました。その時、近藤兄弟は、モスクワ喜びの集いから戻って二日目ということでした。

そのころの私は平穏無事な毎日を送っていると思い、実はそうではないということに気づいていませんでした。ですから、近藤兄弟に話した内容は、今思うと愚痴そのものでした。返ってくる言葉は、「みことばに従うだけだよ」の繰り返しでした。（こののち、この言葉に「そうです」と言えるようになるまで五年ほどかかりました。）

「みことばに従う」とは、いったいどういうことなのだろう？この疑問は私の頭から離れることなく、二週間が過ぎました。小笠原みどり姉妹を紹介していただいたので、仙台の台原のお住まいへ伺い、二時間ほど楽しく交わっていただきました。そして、迷いなく仙台集会へ集わせていただくことになりました。

その五ヵ月後、吉祥寺でベックさんに一時間ほどお交わりをしていただくことができました。飛んで跳ね上がりたいほど心が軽くなりました。私のこの変わりようを、娘が感知しないわけはありません。「ただいまー」と玄関のドアを開けた瞬間、「お母さん、今度行く時、私も連れてってー」と言いました。集会に誘ったことはありませんでしたが、言葉は要らないと思いました。

その二ヶ月後、私は仙台喜びの集いで受洗をさせていただきました。静かに過ごせることが当然のような、感謝を忘れた日が続いていました。

三月十一日の大地震は今までに経験したことのない激震でしたが、大した被害はありませんでした。間もなくマレーシアにいる長男から安否を気遣う電話が入りました。無事を知って安心した様子でしたが、間もなく二度目の電話が入り、あと二分で第一

波の津波が来るからすぐに避難するようにと、いつになく厳しい声でした。夫と二人で、家まで津波が来るはずはないと言いながらも急いで長男の指示に従いました。後になって、近所で亡くなられた方が多かったことに驚きました。私たちに届いた津波情報は長男の電話だけでしたので、夫と二人で感謝しました。

避難所生活の三日目に、町内には津波と火災で一軒も家が残っていないことを知りました。「あなたの家も土台しか残っていません」と教えられた時、私は肩の荷が降りたように全身が軽くなっていくのを感じました。「主はおられる」と気づかされた瞬間でした。

三月十一日以前の私は、夫と二人のうちどちらか一人になった時の生活のことを考えていました。その準備として、お墓のこと、相続のこと、築五十五年になる家のこと、不要品の整理など、しなければならないことがありすぎました。主にお委ねすることを忘れていましたので、そういうことが大きな負担になっていました。お墓は市の霊園に移す予定でした。二年続けて霊園の抽選に外れ、今年こそはと思っていたのですが、お骨は行方不明になりました。私の思案は何一つ役立ちませんでした。

今、私は娘一家と三浦市から横浜へ転居することができました。家族六人の生活が再スタートし、私は家族のために台所に立つようになりました。かつて、家族のことを大事にしてくれていた母がいつも台所に立って、私たち家族のためにお料理を作ってくれていたことを思い出し、私もまた同じ機会をいただくようになったことを感謝しています。

罹災以来、兄弟姉妹からお電話、メールを頂戴いたしましたことに深く感謝申し上げます。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

（イザヤ　41・10）

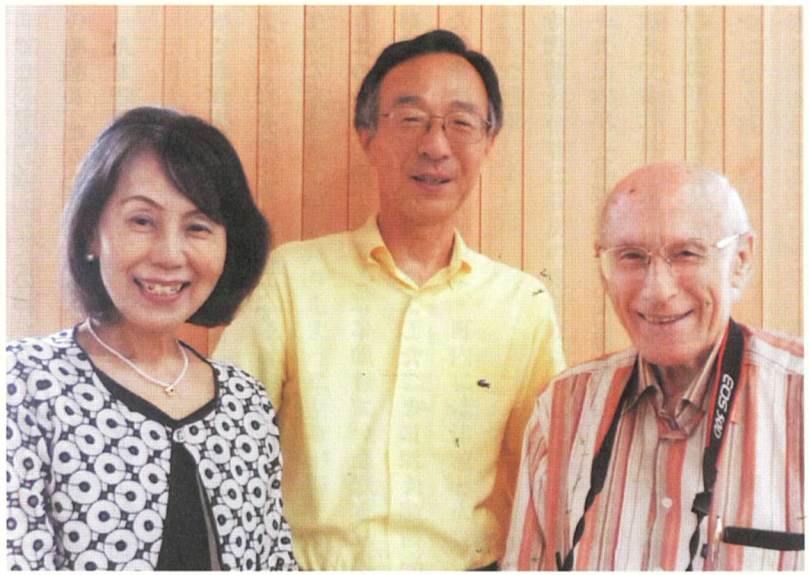
これは、避難所生活の真只中に奥裕子姉妹が送信してくださったみことばです。勇気づけられ、救っていただきました。

この数年の間、みことばに助けていただき、兄弟姉妹に祈っていただきましたことに深く感謝いたします。

寺門清子

一九三六年、宮城県石巻市門脇町に生まれ、五十七歳まで会社員。夫・哲也　一九三二年、宮城県栗原市若柳町に生まれ、五十八歳まで銀行員





夫の雄一さん、ベックさんと

主の豊かな恵みに感謝

石山　俶子（よしこ）

二〇一〇年九月十四日、吉祥寺の火曜日学び会で証しさせていただきましたが、そのときは、胆のうガン告知から二度の手術とその後の抗ガン剤治療のなかにあって、主に守られて多くの恵みをいただいたことを感謝してお話しさせていただきました。し

かし、その頃から抗ガン剤の効き目が薄れてきて、ガンは徐々に大きくなってきていました。ベック兄にその旨お伝えしたところ、「病気は主しか治せないよ。いのちは御手のなかにあるから…。主にお委ねすることだけ。主にお任せしましょう！」と言われました。急に心が平安になり、「病気のことは主にお任せします」と祈りました。すると、「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。」（詩篇　37・5）のみことばが与えられました。

その後、主治医の先生からもっと強い別の抗ガン剤治療の方針を告げられました。「今度のは副作用が強いので、入院治療になります」と言われましたが、病気を主に明け渡していましたので、平安な心で聞くことができました。主の導きだと感じ、主にお任せすることにしました。二〇一〇年十一月から二〇一一年四月までの半年間が、六回の抗ガン剤治療のための入院となりました。

試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。　（ヤコブ　1・12）

痛みと副作用で大変でしたけれど、多くの兄弟姉妹の祈りに支えられ、たくさんの恵みをいただきました。二〇一一年一月入院の折り、お見舞いにおいでくださった姉妹から子どものためのみことばカードをいただきました。そこには、このみことばが書かれていました。

私が呼んだその日に、あなたは私に答え、私のたましいに力を与えて強くされました。（詩篇　138・3）

そのカードをお隣の方のお孫さんにプレゼントしましたら、大変に喜ばれました。「あなたの若い日に、

あなたの創造者を覚えよ。」(伝道者　12・1)のみことばが浮かびました。幼な子に福音が伝えられるといいなと思いましたので、そのときから子どもたちのことを祈るようになりました。

しかし不思議なことに、それまでこの病院では子どもの入院患者を見かけたことがありませんでした。そこで、主治医の先生に「この病院には小児病棟がありますか」とお聞きしました。先生は、「ありますが、なかに入るのは大変ですよ。子どもたちに事故があってはいけないので、鍵がかかっていますから」とおっしゃいました。そして、「それにしても、どうしてなのですか?」とお尋ねになられたので、正直に「『子どものみことばカード』を渡したいのです。お子さんがガンであっても、希望をもつことができ、ご両親や病気のお子さんに永遠のいのちのことを知ってもらいたいのです」とお伝えして、先生にそのみことばカードをお見せしたところ、「可愛いですね！それはいいことです。小児病棟は12階ですよ。頑張って！」と言われました。次回の入院のときには、ぜひこのみことばカードを渡そうと思いました。

退院後、みことばカードをいただいた姉妹にお電話して、このことをお話しすると、大変喜んでくださり、早速私の自宅へ郵送してくださいました。退院から数日後、これも主のお導きかもしれませんが、近くの幼稚園へ園長先生を訪ねていきました。子どものみことばカードを持参して、「子どもたちが若い日に創造主を覚えてほしいこと、昨日も今日も変わらないイエス様のことを知ってほしいこと」をお伝えしますと、園長先生は共感してくださいました。「みことばカードを年少さんと年長さんの全員に配るには足りないので24人の年長さんにお話ししながらお渡ししましょう」とおっしゃってくださいました。園長先生も「可愛い絵に、みことばですね』と喜こんでおられました。その後、園長先生から「卒園式のときに渡しました」と連絡をいただきました。主のご計画に感謝いたしました。

さて、二月の入院の折、姉妹から送っていただいた子どものみことばカードを持って行きました。そのカードを病室に立てていましたら、看護婦さんが「可愛い絵と文ですね」と言ってくださったので、その看護婦さんにイエス様のお話をしながらカードを差しあげることができました。また、病室へお見舞いにいらしたお孫さんにカードを差しあげると、お母さまが一枚一枚読んでくださったり、お子さんたちがみことばを歌にして歌ってくれると、部屋中がパッと明るくなって、心がとても和みました。みことばのパワーを部屋中で感じました。しかし一方で、私は副作用がひどく、気分が悪く、動けず、寝てばかりで、みことばカードをなかなか小児病棟へ持って行くことができず、ただ祈るばかりでいました。

退院の日の朝も気分が悪く、ベッドの上で休んでいると、退院の30分前、急にイエス様から後押しされ、みことばカードを持って小児病棟へ行くことができました。そのときに感じた主のすごい力は、本当に不思議な体験でした。

主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。　(詩篇　23・3)

12階は鍵が閉まっていたので、インターホンで身元を確認されたり、中に入るのに、とても厳しいチェックが必要でした。看護婦さんが受付に来られましたので、みことばカードのことをお話ししましたら、気持ちよく受け取ってくださいました。その看護婦さんも「絵と文が可愛い」とおっしゃってくださったので、イエス様のことをお話しして、希望を持って子どもたちが生き、死は終わりではなく、永遠のいのちがあることを伝えてほしいとお願いしました。それ以上は中

石山俶子

へは立ち入り禁止でしたので、心の中で祈って、看護婦さんへお委ねいたしました。その看護婦さんはみことばカードを気に入っておられるようでしたので、差しあげましたら、「ありがとうございます」と喜んでくださいました。そのお顔が、私の心に残りました。

東日本大震災がありました三月十一日（金）もまた入院しておりました。国立ガンセンターは19階建の高層ビルのため、大変な揺れで、怖く、お見舞いにきてくださった姉妹と主に祈りました。

その後、テレビや新聞でものすごい被害を目にし、なにもできない自分の無力さを感じ、ただ主に祈るばかりでした。多くの方々がお亡くなりになられ、そのなかで私は両親・兄弟を失くした震災孤児に心を痛めました。私もガンを告知され希望を失ったとき、主からみことばが与えられ、希望を持つことができました。子どもたちがイエス様を知り、天国で両親・兄弟・親族の方々と再会できるという希望をもって、これからの人生を主と共に歩んでいただきたいと、そのとき思いました。

二〇一一年五月二十八日、『東北喜びの集い』の当日の朝、主のお導きにより、また、兄弟姉妹のご協力を得て、気仙沼の被災地に行くことができました。テレビや新聞等の報道で知ってはいましたが、まさに、百聞は一見に如かず。凄惨な被害を目の当たりにしてショックを受けました。一瞬にしてこのようになってしまうのか…。「神様、どうしてなのですか」と、思わず心のなかで主に叫びました。すると、「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」（ヨハネ　13・7）のみことばが頭に浮かび、現実をそのまま受けとめることにしました。そして、これから訪ねる避難所の方々に、「彼（主）に信頼する者は、失望させられることがない。」（ローマ　10・11）のみことばを伝えたいと思いました。そして、「イエス様、よろしくお導きください」と心のなかで何度も祈りました。避難所では、多くの方々とお会いさせていただきました。

とくに、子どもたちには、イエス様のことをお話しする機会が与えられました。子どもたちは、三月十一日、その当日のことを話してくれました。小学生の一年・二年生の全員が橋を渡った後、橋が津波で流されたと…。子どもたちには、「神様から与えられたいのちを大切に、そして、なにか困ったときには『イエス様助けてください』とお祈りしてね」と言うと、子どもたちはとても素直に「は～い」と答えてくれました。子どもたちとともに祈ることができました。どの子も本当に素直で、神様から与えられた宝物だと思いました。子どもたちに、みことばカードとお菓子を渡して別れました。いまでも一人ひとりの子どもたちの顔が目に浮かんできます。その子どもたちの心のなかにイエス様が働いてくださることを信じています。

わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。
（ヨハネ　8・12）

このたびの東日本大震災の復興を一日も早く整えてくださいますよう、そして被災地の子どもたちのうえに主からの豊かな恵みと祝福がありますように、主にお祈りいたします。

すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。
（ローマ　11・36）

どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン

石山俶子
一九四七年　下関市生まれ　東筑紫短期大学卒

神と共に歩む人生

ヴィルヘルム・ブッシュ
（8回連載、第3回）

第三章　神はなぜ沈黙なさるのか

この世では多くの悲惨なことが起こります。一九三七年に私はエッセンという町に住んでいました。そこである時、教会の青年会に来ていた十六歳の少年がうろたえ、取り乱しているところに出くわしました。どうしたのかと尋ねると、彼は言いました。「母がユダヤ人だというので私は病院に連れて行かれ、身体中を消毒されました。そして家に帰ったら両親がいないのです」。それ以来、彼は両親に会うことができませんでした。母親は強制収容所に収容され、父親は逮捕されたのです。私は彼のために、急いでオランダの知人経由でアメリカへと亡命させる手立てをつけました。私はこの少年が絶望して取り乱していた顔を一生涯忘れることができません。当時はこのような悲惨な事態が数多く発生したのです。そのような時、神を信じていない人々はよく「神はいったい何を考えているのか。なぜ黙っているのか」と言います。

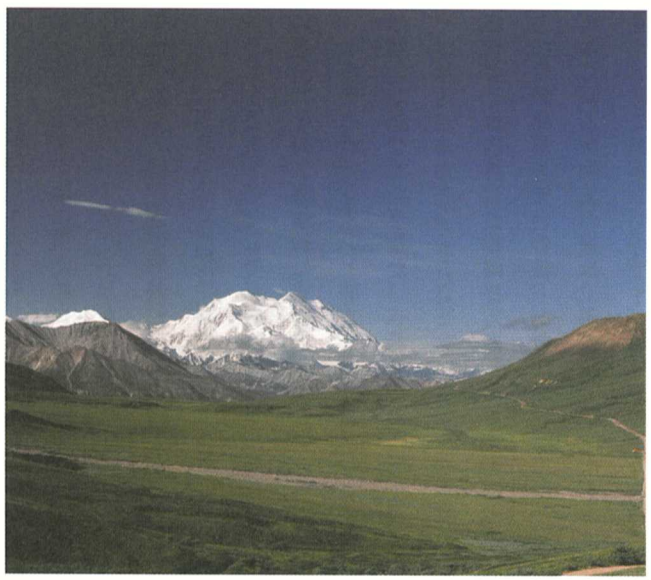
また、悲惨な事件がケルンで起きたこともあります。精神障害者が小学校に火炎放射器を持って押し入り、十二人もの子どもたちを殺害したのです。このような時、多くの人々は「神はいったい何をしているのだろう。なぜこのようなことを見過ごすのだろう」と思います。あるいは、若い女性がガンになり、ひどい苦痛の中で愛する子どもたちを残して死んでいく、というようなケースも身近に見聞します。そのような経験をすると「神はなぜ沈黙しているのか」と思ってしまうこともあるでしょう。過酷な体験をした時、人は「神はどこにいるのか。なぜ沈黙しているのか」と叫びたくなります。

このように「神はどこにいるのか。なぜこのようなひどいことを黙って許しておくのだろう」という疑問が浮かぶと、あなたは次第に「もしかしたら神など存在しないのではないか？天国は空っぽなのではないか？無神論のほうが正しいのではないか？」という危険な考えにとりつかれるかもしれません。

しかし、もし神が存在しないのであれば、私たち人間は見捨てられたことになります。道に迷った子どものように、家に帰ることができなくなります。私たち人間だけがこの地上に捨て置かれてしまうなら、それは何と悲惨なことでしょう。

神を持たない人間にとって、他の人間ほど恐ろしい存在はありません。ローマには、「人は、他の人にとって狼である」という諺があります。

私は長年牧師をしていて、たびたび次の質問を耳にしてきました。「なぜ神は多くの悲惨なことを許され、沈黙しておられるのか」。その質問にこの章でお答えしたいと思います。もちろん私は、神のご計画をすべて知る者ではなく、また神を正しく理解している者でもありません。ですから正しい答えは、ただ聖書の中にのみ求められます。



わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。

（イザヤ　55・8）

根本的に誤った問題提起

最初にはっきりさせておきたいことは、「なぜ神は沈黙しているのか」という質問は「逆転した立場」から出ているということです。この質問はまるで人間が法廷で検事席に立ち、被告人席の神に詰問しているかのようです。つまり私たちが被告である神に向かって、「あなたはなぜ沈黙し、この世のひどいことを許すのか」と言っているかのようです。このように、人間に告発されて被告席につくような神は存在しないのです。

私は二十七歳の時、牧師としてエッセンという町に赴任しました。そこで鉱山労働者の大きなストライキが勃発しました。一人の男が群集の真中に立って、子どもたちの飢餓、資本家の搾取、失業の不安について大声で叫んでいました。彼はそこにいた私を見るなりどなり始めました。

「そこの牧師さんよ、もし神が本当にいるなら、私が死んで神の前に出た時に、なぜこんな悲惨なことを許したのか、なぜ子どもたちを飢え死にさせたのか、なぜ人間がガンで苦しんで死ぬのか問い詰めてやる。そのような神はいらない、立ち去れ、と言ってやるよ」。そこで私も叫びました。「全くその通り。そのような神は立ち去ればよい」

突然その場はシーンと静まり返り、話していた男は驚いた顔で言いました。「ちょっと待った。あんたは牧師だろうが。そんなことを叫んでもよいのか」。それに対して私は答えました。「先ほどからあなたが非難している神、あなたが判事になって詰問している被告人の神は、あなたの想像上だけに存在する神に過ぎないのです。私はそのような神に対しては『消え去れ』としか言えません。私たちの時代が勝手に作り、勝手に被告人扱いし、都合によっては責任を追及したり、ある時には無視したりするような、そんな都合のいい神はおられません。ただし、そうでないまことの神は厳然として存在しておられます。真実の神の前ではあなたが被告人です。そしてそのお方の前ではあなたは口を開くことも許されないのです。あなたはその神に質問されるでしょう。『おまえは、なぜわたしをあがめないのか。なぜわたしに呼び求めないのか。なぜきよくないまま生きてきたのか。なぜ嘘をついたのか。なぜ人を憎んだのか。なぜ争ったのか』と。その時、あなたはことばに詰まり、何一つ答えることができないでしょう。人間が『立ち去れ』などと言えるような神は存在しませんが、私たちに対して『立ち去れ』と命じられる神、聖い、生けるまことの神は厳然として存在しておられます」。ですからもし誰かが神を非難し、「なぜ神はこのようなひどいことを黙って許されるのか」という質問を耳にしたら、すかさずこう言っていただきたいのです。「私たちが非難し、訴えたつもりの相手は、私たちの想像が生んだ神、実在しない神です。聖なる真実の神はただお一人であり、その方は私やあなたを非難し、訴えることができるお方なのです」と。

あなたは神が定められた律法を守っていますか。また、神の律法をどのように考えていますか。神は、ご自分が定められた律法を、真剣に、厳密に守るように私たちに求めておられます。ですから、訴えられるのは神ではなくてむしろ私たちなのです。私たちが被告人なのです。

まず第一に、このことが明らかにされていなければなりません。つまり、「神はどこにいるのか」という問題提起そのものが、根本的に間違っているのです。次に、第二の問題点に移りましょう。

神の沈黙は、神の裁きを意味する

なぜ神は沈黙されるのでしょうか。確かに神はしばしば沈黙しておられるかに見えます。しかしその沈黙は、実は私たち人間に対しての最も恐ろしい裁きなのです。

私は天国が実在することを確信しています。また、地獄も実在します。その地獄とは子どもだましの絵に描かれているようなものではなく、「神が人間に対して何も語られなくなった状態」、それこそが地獄なのです。その時、人々がいかに叫び求めても、いかに祈っても、神はもはや答えようとはなさいません。かつてロシアの小説家ドストエフスキーは言いました。「地獄とは、神が私たちに全く目を向けてくださらない所だ」と。つまり地獄とは、「われわれ人間が、神から全く無視され、忘れ去られてしまった状態」なのです。神の沈黙は裁きを意味します。従って、神が沈黙されるその時に地獄は始まるのです。

ここで旧約聖書の創世記19章から次の話を紹介したいと思います。その昔、ソドムとゴモラという二つの町がありました。どちらも繁栄した町でしたが、神を畏れず、神の律法に従おうとしないそれらの町は、神の目から見て不法と姦淫の町でした。神はその町を滅ぼすために二人の御使いを遣わしました。けれども、町の人々はその御使いをひどい目に会わせようとしたのです。ただ、町の中で信仰のあついロトだけは、この二人の御使いを必死でかばいました。猛り立つ群衆を、自分の娘をいけにえに差し出してまで、なだめようとしたのです。それを見て御使いは、「家族を連れてこの場所から立ち去りなさい」とロトに勧めました。「私たちはこの場所を滅ぼそうとしてやって来たのだから」。ロトが家族を連れて町から逃れた時、神はソドムとゴモラの町の上に硫黄の火を降らせました。二つの町は周りの低地ごと、住民

も動物も植物も根こそぎ滅ぼされてしまいました。

余談ですが、私たちは第二次世界大戦中に同じようなことを経験しました。敵の航空機による爆撃です。しかし、万能の神は、空襲とは比較にならない力と規模をもって火や硫黄を降り注ぐことができるお方です。ソドムとゴモラの人々は驚いて地下室へ殺到したことでしょう。しかし、そこは既に高熱となって燃え盛っていました。人々は助かろうと必死で外に飛び出しましたが、外にも火と硫黄が降り注いでいました。逃げ場を失った人々は、恐怖の中で神が実在し、人間が神を無視し逆らい続けるなら、神はある時から厳しく扱い、すべて滅ぼしてしまうことのできるお方であることに気づきました。そこで彼らは神の憐れみを叫び求めました。しかし遅すぎました。その祈りにも叫びにも、もはや神は答えようとはなさいません。ソドムとゴモラに対するこの沈黙こそ、神の最も恐ろしい裁きでした。神は、彼らがもはや何を言っても真実の神に従わなかったことを責めておられるのです。この状況は今日の世界と酷似しています。私たちの周囲には、神の愛、神の救い、神の律法、神の義に対する全くの無関心がはびこっています。それは大変恐ろしい状態です。私たち人類は今すぐ滅ぼされても当然の、堕落した存在になっています。恐ろしい火によって焼き尽くされることが、今の世界のどこで起こっても不思議ではありません。これは単なる空想ではありません。ある日、あなた自身が体験するかも知れないのです。祈っても叫んでも、もはや神が何も答えてはくださらないという絶望的な状態、これこそ神の沈黙による裁きです。聖書には次のようなみことばがあります。

わたし(神)があなたがたに絶えず、しきりに語りかけたのに、あなたがたは聞こうともせず、わたしが呼んだのに、答えもしなかった。（エレミヤ 7・13）

神が人々に懸命に呼びかけてこられたのに、人々はそれに答えようともせず、無視してきたのです。そしてそれこそが、恐ろしい神の沈黙を呼び起こす原因です。神の沈黙は神の究極の裁きです。

三番目に私が言いたいのは、次のことです。

遠く離れていることが、聞くことの妨げとなる

神が沈黙しておられると思う時、それはあなたが余りにも神から遠く隔たっているということが一つの原因です。

最近、ある青年と次のような話をしました。「ブッシュさん、私の目には神は見えないし、声も聞こえません。神はいったいどのようにして私たちに話しかけられるのですか?」そこで私は新約聖書ルカの福音書15章にある放蕩息子の話を紹介しました。

「ある裕福な地主に二人の息子がいました。ある日、その弟が父親に言いました。『お父さん、私に財産を分けてください』。そこで父親は彼に財産を分け与え、息子は出て行きました。そしてその息子は放蕩して湯水のように財産を使い果たしてしまいました。その頃大飢饉が起こり、彼は食べるにも事欠くようになり、ついには豚の世話をするまでに落ちぶれました。当時のイスラエルでは豚は不潔なものとみなされ、イスラエル人にとって豚の世話をするのは最悪の仕事だったのです。しかしその仕事は、この大飢饉の時代、飢え死にしないで済む唯一の手段でした。彼はあまりにも遠く家から離れていたので、心配した父親が呼びかける声が届きませんでした。しかしある日、彼は我に返って次のように言うのです。

父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にし

そうだ。立って、父のところに行って、こう言おう。「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。」（ルカ　15・17～18）

そこで彼は家に帰ってきました。まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、走り寄って彼を抱き、口づけしました。息子が『お父さん。私は罪を犯しました』と悔い改めて許しを乞うと、父親はしもべたちに言いました。

急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。……食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。（ルカ　15・22～23）

その時、彼は父親の愛の語りかけを全身で聞いた



のです」。もしあなたに神の声が聞こえていないとしたら、あなたは神から遠いところにいるのです。あなたは神のところに立ち返る必要があります。誰でも、自分が神から遠く離れていると感じた時には、すぐ神のところに戻らなければなりません。そうすれば間違いなく父なる神の声が聞こえます。

神の最後のことばを聞こう

私がこれからお伝えすることは大変重要なことです。もし「神が沈黙している」と思うようなことがあれば、次のみことばを聞かなければなりません。

神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。

（ヘブル　1・1～2）

御子とは、イエス様のことです。このイエス様は、「人となられた神のことば」であると聖書に書かれています。

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。

（ヨハネ　1・14）

私たちがことばを発する時、それは息とともに消え去ります。しかし天地を創られた神はことばを、神からの消え去ることのない語りかけとして示されました。上の聖句にある「人」とはイエス様のことであり、イエス様から出ることばは、神の最終的なことばだという意味です。その最終決定であるイエス様のことばをあなたが受け入れないのなら、もはやそれ以上、神にはあなたに言うべきどのようなことばがあるでしょうか。「なぜ神は沈黙しておられるのか」と人々が文句を言う時、私は次のように答えます。「あなたがたが神の最後のことばであるイエス様を受け入れないのであれば、神はもはや、あなたがたに何事も語ろうとはなさいません。イエス様を信じ、心に受け入れなければ、何も始まらないのです。どうかぜひイエス様を受け入れてください」と。

「神様のことは信じているけど、それがイエス様だと言われるとちょっと」という人々にもよく出会いますが、イエス様は私たちにとって「肉となられた神の最後のことば」なのです。このことをさらに説明するために、イエス様のことをもう少しお話ししたいと思います。ルカの福音書5章には、次のような記述があります。

さて、イエスがある町におられたとき、全身らい病の人がいた。イエスを見ると、ひれ伏してお願いした。「主よ。お心一つで、私はきよくしていただけます。」イエスは手を伸ばして、彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ。」と言われた。すると、すぐに、そのらい病が消えた。

（ルカ　5・12～13）

当時、らい病は感染しやすく、不治の病であると考えられていました。らい病人は人里離れた所に隔離されました。そのらい病人がイエス様を見て、身を投げ出して「私をきよくしてください」とお願いしたのです。彼はイエス様を一目見て、すぐに自分の救い主であると悟ったのです。ですから彼は、救い主であるイエス様の前に泣きながら自分の惨めさをさらけ出し、「私の人生は絶望的です。イエス様、どうかみこころでしたら私をきよくしてください。助けてください」と訴えたのです。

私たち人間はみな、このらい病人のようにイエス様の前に自分の惨めな姿をさらけ出すべき存在です。ところで、イエス様はこのらい病人に、どう対応されたのでしょうか。病に犯され変わり果てたらい病

人の姿をご覧になったイエス様は、すぐに彼の頭にさわられました。それを見ていた群集は驚きました。当時らい病人に手を触れるなどということはありえない行為でした。しかし、イエス様は平気でこのらい病人にさわられたのです。私たちはこの記述から、救い主イエス様にとってはどのような汚れも、忌み嫌うべきものではなかったということを知ります。イエス様はその御手を、らい病人の頭に置かれたのです。これがイエス様なのです。あらゆる時代の奇跡そのものなのです。イエス様はいつも、一人ひとりの平凡な人間に対して、次のように言ってくださいます。「わたしはあなたを贖った。あなたはわたしのもの」。そして、罪と汚れで苦しんでいる人に対しては「きよくなりなさい」と言われるのです。

私たちは罪、重荷、病、苦痛、生活難の中にあってうめいている存在です。そんな私たちに対して神は、イエス様を通して愛を示されます。イエス様は人の姿をもつ「神のことば」です。神は沈黙しておられるのではなく、その声は、聞く耳さえ持てば、はっきりと聞こえてくるのです。

イエス様は、罪もないのに私たちの身代わりとなって十字架についてくださいました。その時、十字架の周りを群衆が囲み、イエス様を見上げていたのです。私たちもこの群衆の一人として、十字架のもとに立とうではありませんか。そして十字架につけられたイエス様を見上げてください。いばらの冠をつけられ、あざけられ、ののしられ、傷だらけになったイエス様を見てください。そしてこのお方に尋ねてみてください。「なぜあなたは十字架につけられたのですか」と。イエス様はお答えになります。「あなたが、神に対して負い目、借りがあるからです。あなたが神を拒んで地獄に行き、耐えられない永遠の苦痛をもってその借りを返すか、それとも、わたしが十字架で血を流した代償としてあなたを罪から

贖い出すか、そのどちらかしか道がないのです。誰かが罪の代価を支払わなければならないのです。だからわたしがあなたに代わって犠牲となるのです。このことをよく考えて、わたしを信じなさい」と。

私は幸いにして、若い時にこのことを知ることができました。私たちの罪の身代わりとなってくださったイエス様。イエス様はそれほどまでにして私の罪を取り去り、赦してくださいました。私の身代金を払い、主なる神との和解をさせてくださいました。ですから私は、十字架のイエス様の足もとに私の心を置き、次のように礼拝し、賛美します。「十字架の上で私に代わって死んでくださったイエス様。私はあなたに私の身と心をお捧げします。私のためにいのちを捨てて犠牲となってくださったイエス様！」

十字架にかかって死なれた後、イエス様は墓に葬られました。そして三日の後に、墓は空になりました。一度死なれたイエス様はよみがえられて、マグダラのマリヤをはじめ、多くの信徒の前にその御姿を現わされました。トマスという疑い深い弟子には、ご自身の十字架の傷跡を彼の手でさわらせ、たしかにイエス様だと確信を持てるようになさいました。トマスはイエス様に言いました。「私の主。私の神」と。新約聖書でも核心をなすイエス様のよみがえりについては、ヨハネの福音書21章をはじめ各福音書に記されていますので、ぜひお読みになってください。

イエス様は死者の中からよみがえられたのです。あなたのために死んでくださったイエス様は、よみがえり、天に引き上げられ、神の右の座について、永遠に生きて支配しておられます。そしてイエス様は、神のことばそのものとして、今もあなたを呼んでおられます。あなたがイエス様を受け入れるかどうか、そのことはあなたの人生を大きく決定づける問題です。

神は決して沈黙しておられるのではなく、いつもあなたに語りかけておられるのです。そのことばと

は「イエス様」そのものなのです。それは、愛、恵み、憐れみを意味しています。

私は戦争の時代、ナチスの刑務所に入り、激しい爆撃を経験しました。それは悲惨なものでした。爆撃の最中には、私の周りに八十人以上の死体が転がっていました。兵士だけでなく女性や子どもも死んだのです。私はあまりの恐ろしさに心の中で叫びました。「神よ。あなたはどこにおられるのですか。なぜ沈黙しておられるのですか」。その時突然、次の聖書のみことばが私の頭に下りてきたのです。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。（ヨハネ　3・16）

神ご自身が、私の絶望した心の中に、このみことばを語りかけてくださったのです。そのとき、私の心の目にはゴルゴタの十字架がそびえ立っているのがまざまざと見えました。そこで神ご自身が、私たちのためにご自分のひとり子の血を流してくださったのです。私は、神を理解することはできません。また、なぜすべての罪をお赦しくださるのかもわかりません。しかし、神の愛を証しする灯台が厳然として存在します。それがイエス様の十字架です。

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。（ローマ　8・32）

使徒パウロは、確信をもってこのように言いました。イエス様の十字架の贖いのみわざを信じ、自分の罪を告白し、イエス様に従って生きていくことを決意し、口で言い表した者は、神を無視し敵対する者の群れから離脱し、「神と和解した者」となり、罪と死の世界から「いのちの世界」へと移されるのです。この回心を経験すれば、この世のあらゆる出来事は、もはや問題ではなくなるのです。

私の子どもたちがまだ幼かった頃、彼らは私が毎日していることのすべてを理解することはできませんでしたが、それでも私を信頼してくれていました。同じように、私もイエス様の十字架によって救われ、それを信じ、神の子どもとなったことを知った時、天の父なる神を真の父として心の底から信頼することができました。天の父なる神、主は、すべてにおいて私たちに正しいこと、最善のことをなしてくださいます。私たち信者はそのことを信頼していますから、生きていくことへのあらゆる疑問や惑いは消え去ってしまうのです。このようにすべては、あなたが神のひとり子イエス様を受け入れるかどうか、にかかっているのです。

最後にもう一つ大切なことをお伝えしておきます。



神の沈黙は、あなたを招く呼びかけ

神がこの世の不条理なこと、理解しがたいことを容認しておられる理由について、あれこれ議論することには終わりがありません。私たちは、大きな問題が自分に降りかかってきた時に、初めて神の問題を深刻に受け止めることができるようになります。人生の中で絶望的な暗闇の状態に置かれた時、私はいつも、イエス様の十字架によって脱出の道を見出すことができました。あなたがもし絶望的な状態に陥った場合、大切なことは「なぜ？なぜ？なぜ？」と問うのではなく、「何のために？」と神に尋ねることです。これに関して最後に、私が実際に体験したことを一つお話しましょう。

数十年前に、私がある鉱山労働者の間で牧師を務めていたとき、大きな落盤事故が起こりました。一人の鉱山労働者の腰の上に石が落下し、彼は不幸にも下半身が麻痺してしまいました。回復の望みはありません。ある日、私はこの人を訪ねたのですが、部屋には酒のビンが散乱し、私が入って行くと彼は神に対する恨みつらみを叫び始めました。それはまさに地獄の状況でした。私は、無言のまま出て行くしかありませんでした。私はこのことを聖書集会に参加している抗夫の友人に伝えました。すると一週間後に、この麻痺状態になった人が車椅子に乗せられて、聖書集会に連れて来られたのです。そこで私は彼にイエス様のことを話しました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

（ヨハネ　3・16）

私は彼に、イエス様は信じる者が誰一人失われることのないように願っておられる、と伝えました。彼はそのとき初めてイエス様のことを聞き、突然、一筋の光を見たのです。

三ヵ月後には彼は主イエス様のものとなっていました。すべては新しくなりました。恨みつらみの怒鳴り声が響いていた彼の家には賛美の歌が響くようになりました。散乱した酒ビンは消え、机の上には聖書が置かれました。妻と子どもは元気を取り戻しました。彼が亡くなる前に私はもう一度訪ねましたが、この時のことは決して忘れません。彼は次のように話してくれたのです。「私の人生がイエス様のものとなってこのかた、罪の赦しを得てこのかた、神の子どもとされてこのかた、毎日がクリスマス・イブのようなのです。ブッシュさん、私はもうすぐ死ぬような気がします。そうすれば、神様の前に立つのですよね。しかし、私は死ですべてが終わらないことを知っています。私は永遠の中で、神様の御座の前でひざまづき、神様に感謝します。私の腰の骨を砕いてくださったことを。あの事故が起きていなければ、私は、神様を知らない人生、神様を拒んだ人生を、ひたすら永遠の地獄に向かって生きていたのです。神様が、私を救うために愛をもって介入してくださり、腰の骨を砕いてくださったことによって、私はイエス様を見出すことができました。イエス様によって私は神の子どもとされました。そのことを心から感謝したいと思います。『麻痺状態でイエス様のものとされ、神の子どもとされる』ほうが、『二本の健康な足を持っていても、永遠の地獄に投げ込まれる』より、はるかにいいと思います」

これに対して私は答えました。「神様は、あなたに大変な苦しみを与えられました。初めあなたは、『なぜ神様は沈黙しているのか。神様はどこにいるのか』と文句ばかり言っていました。けれども、今は何のために神様がその苦しみを与えられたのかを

理解なさいました。その事故は、あなたをイエス様のみもとに連れて行き、それを通してあなたが父なる真の神のみもとに導かれる、まさにそのためだったのですね」と。

私たちは神に「なぜ」と尋ねるのではなく、「何のために」と尋ねるべきなのではないでしょうか。私たちの人生の苦しみは、イエス様を通して神が私たちをご自分のみもとに連れて行かれるためなのです。

次のような賛美があります。

父なる神よ。どうか私をイエス様のみもとに導いてくださいますように。御霊が私の心に住んでくださり、私の思いや考えを支配してくださいますように。神様の平安を味わい、感じることができますように。そして、心から賛美できますように。

あなたもこの賛美に加わってくださることを、心から私は祈っています。





主の懲らしめを軽んじてはならない

奥 裕子（ゆうこ）



ご夫妻でお孫さんたちと

私は、学生時代に、ものの良し悪しをしっかり自分で判断し、責任を持って生きていきたい、と思っていました。また、人生の目的は何か、真理とは何か、と考えていました。全く理屈っぽいものでした。クリスチャンホームではありませんでしたが、なにか心惹かれる思いがして、いくつかの教会をたずねました。キリスト教を知りたいと思いました。しかし、あるときは、「信じた」と思っても、信仰の確信にはつながりませんでした。真剣に求めましたが、神様を見出せずにいました。

大学卒業後、知らず知らずのうちに、求めることもなくなり、毎日の現実の生活に埋もれていきました。その後、結婚、そして、育児に追われた十五年間でした。四十歳を前にして、突然のように、自分の姿、数々の過ちが心に浮かび上がり、漠然とした不安に陥り、久しぶりに聖書を読み始めました。詩篇を読むことで心落ち着き、「教会に行きたい」との強い思いが与えられました。子どもたちが日曜学校に通っていた茅ヶ崎の教会に、主人と一歳半の次女と三人で行き始めました。

それからは、家族六人そろって教会に集いました。その年のクリスマス、勧められるまま、主人と二人、滴礼で受洗いたしました。

三十人くらいの教会でしたが居心地よく、子どもたちも楽しく集っていました。

私は、教会の機関紙に小さな証しとして、「私の数々の過ちをイエス様の十字架上での血潮によって罪赦された者としてくださり…」と書いた記憶がありますが、十字架の深い意味も、罪の赦しもわかっていませんでした。信仰を持つことによって、清められ、立派な良い人になっていくのだと思っていました。しかし、自分の心のうちは、依然としてねたみ、憤り、高ぶり、裁きなど、見たくもない自分の性質が浮かび上がります。これは、信仰が薄いから

だ、と苦しい思いでいました。こんな信仰でいいのかしら、間違っているのではないかしら、と思い悩むこともありましたが、いつかわからせていただけるだろう、と主人と話していました。

そんな中、次男が高校三年の二学期から突然、深い悩みの中に入り、学校に行けなくなりました。半年前ほどから元気がなくなってきているのには気づいていましたが、思春期特有のものであり、自分で抜け出るのを待つしかないと思っていました。

元気で、活発で、スポーツが得意だった子が、ものも言わず、苦しそうな表情で、学校にも礼拝にも行かなくなったのです。

何が彼の中で起こったのか、口を閉ざし、話さないので、わかりませんでした。私は人生の先輩として助言したり、説得しようとしたり、また、心を開かせ、解決の道を一緒に探そう、と促し、努力しましたが、結果的に息子の心を追い詰めただけだったようです。

主人は、その時二十年勤めた大学病院から、企業の産業医に勤務が変わりました。大学病院時代は、子どもとゆっくり話すことはまずありませんでしたが、勤務が変わって時間の余裕もでき、息子に関われるようになったのは、感謝でした。私一人で対応することは、とても困難になっていたからです。

教会の方たちも心配してくださり、祈ってくださいました。二年近くの悪戦苦闘の中、どんどん彼の状態が悪くなり、最悪の状態のときに、教会の友人が「光よあれ」と、集会のテープを送ってくださいました。そして、礼拝に行けなくなった息子を心配して、吉祥寺集会へ行くことを勧めてくださいました。「この集会は、姉妹たちの祈りがたくさんあってすばらしいところです。祈りが次から次へと聞かれていく、祈りの集会です」と紹介してくださいました。

実は以前にも、「光よあれ」を教会で取り寄せ読んだことがあったのですが、あまり読み進めることができませんでした。兄弟姉妹のお証しの素晴らしさより、苦しみの大きさに、臆病な私は本を閉じてしまっていました。しかし、今回は、自分自身が苦しみの真っただ中にいてどうしたらよいのかわからず、人間的な解決の道は全く絶望的に見えましたから、お証しの一つひとつが心に染みとおりました。問題や試練・悩みは異なっていても、主により頼み、主に委ねるとき、主が奇跡をなしてくださっていることが読み取れました。苦しみは恵みへと変えられていく様子が読み取れました。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。
私はそれであなたのおきてを学びました。
（詩篇　119・71）

一筋の光が心の中に差し込んだようでした。「光よあれ」の中で証ししておられた人たちのように、私たちも、この苦しみの中に希望が生まれ、いつの日か、恵みとして受け取れるようにしていただけるかもしれない、と思いました。

また、集会のテープの次のみことばが深く心に入りました。

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。
（ヘブル　12・5〜7）

私は、二年間「元気だった子どもを、こんなにし

てしまった。これは、私の神様からの罰だ」と受け止めていました。その苦しみのときに、主はいろいろと気づかせてくださいました。主は何度も日常の様々なことを通して私に働きかけてくださっていたこと、時にはそれに気づきながらも自分の思いを優先させていたこと、愛のない自分中心の母親であったことなど・・・

主は、そんな私をも「わが子よ」と、愛をもって呼びかけてくださっていると知り、うれしく、涙が止まりませんでした。

「彼を、集会に連れて行こう。そこに行けば主イエス様に出会わせていただける」と強く思わされ、「光よあれ」に書かれている家庭集会のお宅に一つひとつ電話しました。そうして、二宮集会が、一か月後にあることがわかり、その間、祈って、祈って、待ちました。この集会に彼を連れて行けばよい、そしてベックさんにお交わりをしていただこう、そのことだけでした。

しかし、その日の朝、息子は、「行かない」と言い、私は一人で出かけました。集会でベックさんに初めてお会いし、お交わりいただきました。私の話を聞かれた後、ベックさんは「浩志に会いたいなあ」とおっしゃいました。そのことをそのまま持ち帰り、息子に話したところ、「行く」と一言、言いました。その夜の厚木集会に、祈りつつ、二人で出かけました。

途中何度も不安がよぎりました。それは、昼間の集会で見た大勢の人たちのことで、あのような大勢の人たちの中に果たして入っていくことができるだろうか、と不安になりました。

「イエス様、導いてください。息子があなたと出会うことができますように」と、必死で祈りました。

集会のあるお宅に着いた時には集会の始まる時間を過ぎていました。不安な気持ちをかかえながら玄関の戸を開けますと、何とベックさんお一人がそこに立って電話で話しておられたのでした。しばらくして、ベックさんは私たちの方を向き、「浩志、よく来たね」と、何と息子の名前を覚えていてくださり、招き入れてくださいました。そして、「僕の隣の席が一つ空いているよ、行きましょう」と、息子の肩を抱くようにして、部屋に連れて行っていただきました。沢山の兄弟姉妹たちが、集会の始まるのを待っておられました。部屋は輝きに満ち、まぶしく、ここは天国ではないかしら、と思いました。

この日のことは、今も鮮明に覚えています。こんな小さな、貧しい、不信仰な者を、主は名前を呼んで、招いてくださるのだと、心からうれしく、感謝でした。次男は、ベック兄と個人的にお交わりいただき、翌朝から、聖書をともに読めるようになりました。一方的な主のあわれみでした。

その後、次男は、吉祥寺にあるドイツパンの店リンデに働く場を与えられて今に至っています。今年で十三年になります。職場では、集会の兄弟姉妹に祈られ、教えられ、育まれています。コリント書のみことばのとおりに、弱さを認めて主により頼み祈るとき、主が成し遂げてくださいます。私たちは、次男の弱さを通して主が働かれることを見せていただきました。

わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。

（2コリント　12・9）

この集会に導かれたのは一九九二年、御代田の福音センターができた年でした。私は「息子が、息子が」と必死でこの集会に連れてきました。私自身は、当初教会を移る気持ちはなく、息子が悩みとともに礼拝に行かれなくなったため、彼にとって、イエス

様に出会えるところを、と思っていました。が、それは、私たちのためでもありました。それまでは聖書を、人間の頭で理解し、実証できることだけが真実のこととして受け止めていました。奇跡、御霊、サタン、天国、永遠のいのち、などはタブー視して、主のお働きを人間の大きさにしていました。

この集会に導かれて初めて、「主は、今も生きて働かれる」と、聞くことができ、自分自身も体験させていただき、その真実に接することができました。生きて働いてくださる全知全能の主に祈り、信頼できる幸いをいただいています。

若い時、「人生の目的は何か」との問題意識を持ちましたが、その答えも聖書の中にありました。

わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。

（イザヤ　43・7）

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

（1コリント　6・19～20）

どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。

（エペソ　1・17～19）

奥　裕子

一九四四年兵庫県生まれ。大阪教育大学付属池田中学校、大阪府立豊中高校、東京女子大学社会学部卒。夫淳治、二男、二女。



主は常に真実です

奥 由里子



ご両親と

主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。
あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、
私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩
みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知って
おられます。（詩編 139・1～3）

私は一九八二年、四人兄弟の末っ子として生まれました。クリスチャンホームの家庭に育ち、小さい頃から自然とイエス様を信じていました。

十歳のときに教会から集会へと移ってきました。その後も信仰は守られ、大学二年生のときイエス様の十字架を自分のこととして受け取りました。

大学では英文学を専攻したのですが、就職に際して、何をやりたいのか、どうしたら良いのかわからないまま祈っていたある日、「イエス様がこの世に来たのは仕えるためである」と、「仕える者になりなさい」とのみことばが強く心に留まりました。年の離れた兄や姉たちに囲まれて育ち、人から面倒を見てもらってばかりの私なので、「仕事を通して、『仕える』ということを教えてもらえたらいいな」と思い、安易なのですが、福祉の道にひかれるようになりました。

静岡県にあるキリスト教系の知的障害者施設へボランティア体験に行き、そこの雰囲気にひかれて就職を希望し、決まりました。そこには、三十名の知的障害者が暮らしていました。ほとんどが「重度」と言われる方たちで、ことばが出るのは五～六名ほどでしたが、何十年も前から家庭を離れ、施設で生活を共にしてきていたため、ことばがなくてもお互いを受け入れあい、家族のような関係ができており、温かな雰囲気をつくり出していました。

お仕事は食事や入浴など日常生活の支援でしたが、不規則で、日曜日が休みなのは月に一回程度でした。周りの方々は随分心配し、祈ってくださったと思い

ますが、当の私はといえば、「私は大丈夫。イエス様から離れたりしない」と思っていました。それは、主に対する信頼というよりも、自分の信仰に対する自信でした。自分が本当に弱い者だということもわからずにいたのです。

それからの生活は自分の思いとはまったく反したものとなりました。私は恋愛に疎く無関係だ、などと思っていたのですが、好きな人ができ、あっという間に相手のことで心が一杯になってしまいました。イエス様のことを伝えたいという思いも消え、自分の気持ちに支配されるようになりました。次第にイエス様や信仰に対して目をつぶるようになり、聖書を開くことも、祈ることももしなくなってしまいました。もっと悪いことに、そんな自分の状態や問題が光の中に出されるのを恐れ、親しい兄弟姉妹、両親にさえも隠していました。実家に帰れば、本当に愛をもって祈ってくれる両親の姿に胸が痛くなり、集会へも、両親に連れていかれるようにして出ると、改めて自分の離れた状態を思わされ、辛くなるといった状態でした。

集会に来ると、「自分は外の人間だなあ」と感じました。兄弟姉妹の顔は輝いていて「この人たちは本物を持っている」と思わされました。「本当に、この人たちは、悩みの中でも変わらない希望や喜び、神様への信頼があるんだ」と思わされ、やっぱりここには真実がある、私もこんなふうになりたい、ここに戻ってきたい、と思いました。

慣れない仕事で悩んでいた時期でもあったため、本当に頼れるもの、揺るがないものがほしいと感じました。そして集会から帰るたびに、神様のところへ戻りたい、と別れ話を切り出し、神様へも叫ぶようにして「戻りたいです」と言うのですが、時間が経てば結局元に戻ってしまい、同じことの繰り返しでした。

「隠す」ということが一番の問題であると気づきながらも、どうしても言うことができず、こんなに苦しくても、自分でどうしたら良いかわからなくても隠し通そうとする、自分はこんなにも恐ろしく自我の強い者なのかと、思わされました。そして、戻りたい、でも別れられない、という葛藤を続けるうちに、いよいよ疲れてしまい、「もうだめだ。どうしてもイエス様のところへ戻りたい」と、最後の別れを切り出し、ようやく両親の前に悔い改め、主イエス様のもとへと戻ってきました。

戻ってもしばらくは、聖書を読んでも何が書いてあるのかまったくわかりませんでした。慣れ親しんでいたはずの聖句もまるで真新しいもののようでした。たとえば、以前は大好きだった「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」(イザヤ　43・4)というみことばも、なぜこの私に対して、このように言ってもらえるのか、嬉しいという感情ではなく、ただただ不思議でした。

ただ、「聖書に書いてあることはすべて本当なのだから、よくわからないけれどとにかく信じよう」という思いがなぜか与えられていました。以前は、「あぁよくわかる。感謝だなあ、このみことば。おいしい。おいしい」と食べていたみことばを、味もわからず丸ごと飲み込むようにして、一つひとつ読んでいきました。

今まで当たり前のように持っていた信仰が、自分から出たものではなくて、イエス様から一方的に与えられていたんだ、と思わされました。小さいときからイエス様の存在を疑うことなく信じて育ってきたため、いつの間にか、「私は信仰をもともと持っているんだ」と思い違いをしてしまっていました。けれども、自分は、頑なに自分の思いを通し、また、主のことをまったく理解できないものであり、主を信じられる根拠は、自分の内にはないことを思わされました。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。（エペソ　2・8〜9）

その後も、主から離れていた自分の態度やどうしようもない肉の性質を思い、辛くなることが何度かありましたが、そのたびに「主の十字架によってもうすべてが完了しているんだ。主の十字架は決して揺るぐことがないんだ」と、みことばを通して確信でき、平安が与えられました。

私自身の内には救いの根拠は何もないどころか、神様の目には死ぬべき存在でしたが、イエス様が身代わりとなって十字架にかかり、「完了した」と言ってくださり、勝利の主としてよみがえってくださったということを覚えると、測り知れない主のご愛に、感謝の思いでいっぱいになります。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。（ローマ　8・1〜2）

私は「仕えるということを教えてもらいたい」と、福祉の仕事に就いたのですが、実際に仕事にたずさわってみれば、そのような力がまったくないことを知らされるばかりで、とても惨めでした。

特に、一人の方を通し、自分の愛のなさを知らされることとなりました。施設では、三十人の方を、その日の勤務の職員で支援していましたが、一年を通しても、支援のプランをたて、健康面や精神面を特に細かく見ていく方を「担当」と呼び、一職員が二〜三名を受け持ちます。日々意識を持って関わって支援するので、自然と関係も深まっていきます。

しかし私は、担当であるひとりの方をどうしても受け止めることができませんでした。彼女は不安感が人一倍強く、何かあれば私の存在を求め、頼ってくるのですが、私は彼女が不安定な状態になると彼女が強く依存してくるように感じ、「私にはとても負えません」と真っ先に逃げたくなってしまうような者でした。

二年、三年と続いて担当を受け持つごとに、愛したくても愛せない自分に苦しみました。「彼女は寂しくて苦しくて、私を頼ってくるのに、なぜ、私は受け入れられないのか。イエス様への信仰によって、できるはずではないか」と考えて祈る日々でした。どうすれば愛せるようになるのか、と頑張れば頑張るほど、自分にはできないことを思わされるばかりでした。

そんな中、あるメッセージを通し、自分の力で愛そうと頑張るのはやめ、「私はそのような者です、貧しい者です」とただ認めるようになり、あわせて、「イエス様は真実に愛の方であることを感謝します」と祈るように変えられていきました。私は本当に何もできないけれど、主は必ず彼女に愛をもって語ってくださる、彼女の孤独も悩みもすべてご存じで、慰めてくださる、と思うようになりました。

それからも自分の内側の変化は特に感じられず、相変わらず愛のなさや貧しさを思わされるばかりで、苦しむこともありましたが、イエス様のご愛は変わらないということを思うたびにいつも慰められ、平安が与えられました。

結局、どのようにしてかはわからないのですが、次第に彼女との関係は変わり、いとおしいと思える存在にまでなっていました。私は、ずっと彼女を愛せずに悩んでいましたので、このように変わったのが本当に不思議で、これは、私ではなくて、私の内におられるイエス様なのだと思わされ、感謝しました。

少し前後しますが、悔い改めて主に立ち返った後、

日曜の礼拝を守るために仕事をやめたいと切に思わされ、祈っていました。ほどなくして、施設の建物の構造的な問題等から、あと二年ほどすれば施設を閉じる、ということが知らされました。四十年も前から、皆が家族のように生活を共にしてきた施設がなくなり、皆が五十代、六十代にして新たな生活に入るなんて考えられないことであり、主は本当に人の理解を超え、すべてを支配しておられるんだと思わざるをえませんでした。

そこから様々なことがあり、特に閉所の半年前ほどから、職場内は人手不足や大変な忙しさ、慌ただしさで落ち着かず、不安定な状態となりました。様々な情報が職員の間で飛び交い、そのたびに不安や思い煩いに駆られました。閉所後、職員や施設に入所していた方々は、同じ法人の施設へ別れていくことになっていたのですが、「このままでは大変だ。利用者さんが混乱してしまう、何かできないか」と焦り、同僚たちと考える日々でした。理事長は主イエス様を信じている方でしたが、その理事長に対し、「現場をよく知らぬままに、大事なことを決め、結局振り回され大変なのは現場ではないか」と批判的になったりしていました。

そんなあるとき、母からウォッチマン・ニーの『権威と服従』という本をもらい、読み進めるうちに、権威と服従の問題が自分のこととして迫ってきました。

人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。（ローマ　13・1）

法人の理事は、主が建てられた権威であり、私の取るべき態度は、ただ、それに従うことなのだ、と知らされました。

しかし、信仰を持ってただ従いたい、と頭では思うのですが、日々の勤務にあたれば次々と問題や心配ごとに心を奪われ、それが不平不満、そして不従順へとつながりました。権威に逆らえば逆らうほど平安がなくなり、苦しくなるのですが、結局そのような状態はどうしようもなく、辞めるまで続きました。

ああ。陶器が陶器を作る者に抗議するように自分を造った者に抗議する者。粘土は、形造る者に、「何を作るのか。」とか、「あなたの作った物には、手がついていない。」などと言うであろうか。イスラエルの聖なる方、これを形造った方、主はこう仰せられる。「これから起こる事を、わたしに尋ねようとするのか。わたしの子らについて、わたしの手で造ったものについて、わたしに命じるのか。このわたしが地を造り、その上に人間を創造した。（イザヤ　45・9、11～12）

私は、目に見えることや現在の状態をもとにして、人間的に良いと思われることや理屈を並べ立て、表向きでは利用者さんを心配し、力を尽くそう、と考えていましたが、すべてをご支配しておられる主の前には何の意味もありませんでした。それは、自分を正しいとして、主に逆らう罪でした。理事に対して逆らう思いのあった私は、主に対して逆らう者であり、主を信頼せず、不平不満を言う肉そのものだと思わされました。

仕事を施設の閉所時に辞めてから、自分が間違っていたことを思わされ、自分の内にある、主に逆らう肉の性質とその恐ろしさを示され、悔い改めへと導かれました。自分の判断や理屈ではなくて、善悪でもなく、主の建ててくださった権威に従い、先がわからなくても、主はすべてのことを支配し、計り知れないご計画に沿ってすべてをなしてくださると信頼したいと、今は思わされています。十字架の死にまでも従われた主イエス様を思うとき、本当にた

だひれ伏す思いとなります。

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。（ピリピ　2・6～8）

仕事についた五年間を通し、本来の私とは、自分が思っているような者ではなく、必死に祈って努力しても結局できない者であることを示されました。

私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。・・・私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。・・・私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。（ローマ　7・15、18～19、24）

本当に、このみことばの通りの状態であったと思います。

しかし、「本当に私にはできません。私はそのような者です」と手放すとき、自分の目が、自分自身から主へと移され、解放されて行きました。「私は貧しい。私はできない」というだけの思いから、「けれども主は満ち満ちて富んだ方。すべてを持っておられる方」という思いへと変わるときには、元気が出てきました。

私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。（2コリント　4・7）

わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。（ヨハネ　15・4～5）

ぶどうの枝のみではいのちはないけれど、木につながっていればそこから豊かにいのちが流れ出てきて、豊かにすべてをもっておられる、主のいのちが注がれるんだと思うと、うれしくなります。

キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。（コロサイ　2・9～10）

私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。（2テモテ　2・13）

奥　由里子
一九八二年、神奈川県生まれ。平和学園中、桐蔭学園高校、上智大学文学部卒、社会福祉法人牧の原やまばと学園に就職し、二〇一〇年三月退職。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい

宮代（みやしろ） 友未（ゆうみ）



左から友未さん、妹の麗子さん、お母さまの雪恵さん

私は二〇〇八年にイエス様を信じ、救われました。二年ほどたちますが、大きくわけて、三つのよかったことがあります。

一つ、姉の死から解放されました。姉は天国にいる、よかったと心から喜べるようになりました。

わたしは主、あなたをいやす者である。
（出エジプト　15・26）

必ずわたしはあなたを解き放って、しあわせにする。
（エレミヤ　15・11）

二つ、生きるむなしさが減りました。生きるも死ぬも主の御手にあると思えたら、楽になりました。

人の歩みは主によって定められる。（箴言　20・24）

三つ、将来の不安がなくなりました。生きる単位が一日一日になりました。

主の祝福そのものが人を富ませ、人の苦労は何もそれに加えない。
（箴言　10・22）

あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。
（マタイ　6・34）

私が高校一年の十一月に、大学一年だった姉が自殺しました。十一年たった二〇〇八年の春、私はようやくイエス様を見上げました。

姉（響といいます）が死んだとき、私が第一に思ったのは、「これで私の人生は普通でなくなった」でした。「自殺するような子をもった家」――親戚や周囲から、そういう目線やことばが実際に突き刺さりました。もともと他人の目を気にする私は、この

まま一生負のレッテルを貼られて生きていくのだ、と思ってしまったのです。ベック兄や田中順子姉妹が幾度となく「響は天国にいるよ。今は喜んでるよ」、「響ちゃんは大丈夫。天国だよ」と言ってくださいましたが、当時の私には理解しがたく「お姉ちゃんは、天国でいいかもしれない。でも残された私たちはどうなるんだ。この家の問題は、お姉ちゃんがきっかけではないか」とささくれだっていました。そんなある日、戸棚を整理していたら、黒地のノートを見つけました。パラパラとめくると、「みんなありがとう」という文字が目に飛び込んできました。白い色えんぴつで、それだけ書いてありました。「姉だ」、となぜか思いました。涙がこみ上げてきました。泣き崩れるという経験を初めてしました。「ごめんなさい」、「ごめんなさい」と呟きながら、初めて、姉に対してとった態度を後悔しました。謝りたい姉はもういない。挽回できるチャンスもない。取り返しがつかないことがあることを知りました。そして自分がひどく冷たく、自己中心的な人間であることを思い知らされました。みじめでした。それでも私はイエス様を見上げませんでした。ただ、自分で自分自身を見放しただけでした。むなしさだけが残りました。その後、私は東京の大学へ進学し、卒業し、地元の静岡に戻り就職しました。将来への恐れとむなしさがいつも心の底にありました。

空の空。すべては空。（伝道者　1・2）

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。（ローマ　7・24）

私は生きていることを憎んだ。日の下で行なわれるわざは、私にとってはわざわいだ。すべてはむなしく、風を追うようなものだから。（伝道者　2・17）

私は、救いを求める気力も、憎む気力もなく、悲壮感や辛さからでもなく、ただ、たんたんと「今、この瞬間自分が消えても、後悔しないな。むしろ消えちゃいたいな」と思っていました。

姉の死によって、それまでの蓄積されていた膿がふきだすように、家庭はずっとガタガタしていました。十年たって、ようやく落着きはじめ、私は、自分の将来に目を向けるようになりました。そして、「転職をしよう。でもその前に神様を信じたい」と思うようになりました。やりたいことも成し遂げたいこともなく、自分自身を信用していない私は、「絶対的なものにゆだねたい。神様が決めてくれたことなら、きっと後悔しない。迷わない。だから信じたい」と思いました。そして名古屋、御代田、伊豆高原とキャンプや集会に連れて行ってもらうようになりました。驚いたのは、自分と同年代の姉妹たちが「イエス様大好き！」と言いきっている姿でした。まっすぐな思い、素直さが、世間体を気にするひねくれた私には、うらやましくもあり、圧倒もされ、正直ちょっと腰がひけました。また、年輩の女性たちが内面から輝いているのを見て、「ああ。私もこういう歳の取り方をしたいなあ」と思いました。そうこうするうちに、自然と祈るようになっていました。

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

主はその人に選ぶべき道を教えられる。（詩篇　25・12）

あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め。」と言うことば

を聞く。（イザヤ　30・21）

わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。（詩篇　32・8）

転職には、仕事内容に懸念がありました。そんな時にある姉妹から「すなおに祈ればいいのよ。私は行きたくありません。ですが御心なら通してください」と言われました。その通りに祈ったら、内定をいただいてしまいました。そして二〇〇八年の四月、私は転職をし、東京に出てきました。仕事は思っていた以上にストレスがかかり、不安にさいなまれる毎日でした。そのころの日記には、「イエス様を信じたら、全く自分に自信がなくなりました。何も決められなくなりました。何もできなくなりました。仕事が今まで以上に苦痛になりました。自分は消え、ただただ主の支配によって導きのままに進んで行きたいのに、仕事において、祈りながら主の導きを『待つ』ことが大変難しく感じます。すべてをゆだねることが、こんなに難しいことだとは思いもよりませんでした。信じたらすぐに、求めてやまなかった平安のうちに生きられるのだと思っていました。喜びと平安がこんなに手の届かないものだとは思ってもいませんでした。自分の自我が、頭で理解しようとする性格が、こんなにも頑固であったことを知りました」と書いてありました。

「罪ってなんだろう」、「愛ってなんだろう」と救われた確信がないまま、仕事に追われ、追い詰められていました。ある休日の朝、脂汗をぐっしょりとかいて目が覚めました。立ち上がれず、ふとんの上で自然とひざまずきました。詩篇32篇と51篇を声に出してとつとつと読みました。涙があふれてきました。

読み終えたあと、「ああ、私が罪なんだ。そうなんだ。自分ではどうしようもなくていいんだ」とストンと落ちてきました。汚いものを全部出しきったような、けだるさと爽快感がごっちゃになっていました。「ああ、これが救われるってことなのかな」とホッとしました。

その後も、主は私を支え、導き、いましめ、守ってくださっています。みことばにあるように、主の思いと私の思いは全くことなるため、驚き喜ぶことも逆に苦しむことも多くあります。「驚き喜んだ」ことは、二〇〇九年九月に行われた伊豆高原のキャンプで、受洗できたことです。父と妹への証しになればと洗礼の時期を祈っておりましたので、二人がいないキャンプで、洗礼を受けようなどとはつゆほどにも思っていませんでした。しかし、洗礼式当日、あれよあれよという間に運ばれました。主の御心かどうかを計りかねている私に、ベック兄が、「みことばじゃないけど…善は急げ、だよ。響がよろこぶよ」と言ってくださいました。水に入った瞬間は、自分がからっぽになって、主のなかに入ったような気がしました。平安でした。

人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは主である。（箴言　16・9）

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。（ヨハネ　14・27）

「苦しむ」ことは、日々の仕事です。現在、私は食品カタログやチラシを制作する編集職についています。前職では書籍や情報誌を編集していました。編集の仕事は、私にとって苦しくても楽しいことで

したが、今は五里霧中という状態です。そして周りを責めてしまうことの多い日々です。そんな私に次のみことばがせまります。

しもべたちよ。尊敬の心を込めて主人に服従しなさい。善良で優しい主人に対してだけでなく、横暴な主人に対しても従いなさい。（1ペテロ　2・18）

むだ口をたたく愚か者は踏みつけられる。（箴言　10・8）

神は馬の力を喜ばず、歩兵を好まない。（詩篇　147・10）

あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。（箴言　3・6）

主よ。私の口に見張りを置き、私のくちびるの戸を守ってください。（詩篇　141・3）

クライアントとの交渉や、上司との調整、原稿やラフ書きなど、大きなものからほんのちょっとしたことにまで、主を前に置けば、みことば通りに主が成し遂げてくださることを実感している一方で、なかなか喜びが持続せず、苦しさがあります。むなしさに襲われたり、人を恐れたり、緊張したり、思い悩んだりします。そのような毎日でも、みことばと祈りによって、朝、起き上がる力をもらい、夜、思い煩いを手放すことができるのは、イエス様を信じる前と今の大きな違いです。

主は私のささえであった。（詩篇　18・18）

私なら、神に尋ね、私のことを神に訴えよう。（ヨブ　5・8）

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。（詩篇　55・22）

主の手に陥ることにしましょう。主のあわれみは深いからです。（2サムエル　24・14）

あなたが横たわるとき、あなたに恐れはない。休むとき、眠りは、ここちよい。（箴言　3・24）

平安のうちに私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。主よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。（詩篇　4・8）

私が今、仕事を続けていられるのは、「この職場は主が与えてくださったもの。だから辞めることを決めるのは、私ではない」と思えるからこそです。朝に昼に晩に「イエス様、まだですか」と訴えてしまいますが、不思議なことに、転職を後悔したことは一度もありません。これは、本当に感謝なことだと思います。

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。（伝道者　3・11）

「その通りだなあ…」とつくづく感じます。

宮代　友未
一九八〇年静岡県生まれ。沼津東高校、立教大学文学部卒。（株）静岡新聞社出版部勤務を経て、二〇〇八年四月（株）シータス&ゼネラルプレスに入社。現在に至る。

失望してはならない

藤枝 和治



右から和治さん、奥様の明美さん

神は愛です。愛のうちにいる者は神のうちにおり、神もその人のうちにおられます。（1ヨハネ　4・16）

会社の仕事や人間関係に身も心も荒れていた私に、妻は「イエス様が待っているよ、イエス様が呼んでいるよ。集会に行こう、早く行けば早く楽になるから」と七年間誘い続けていました。家庭崩壊寸前でしたが、家内はその間ずっと、多くの兄弟姉妹の方々と、私の救いのために祈り続けていたのです。

「神様は私には必要ない、神に頼るのは弱い者だ、そんなふうには見られたくない」と、集会に集うことを拒否し、会社が休みの日には、ストレス発散のために魚釣りに出かけていました。また勤めから帰れば酒を飲みながらテレビにかじりつき、ささいなことでも家内や子どもたちに八つ当たりして、どなり散らしていました。こんな私が、十七年前のある日、突然「来月から集会に行く」と言ったのです。

この時、私にはわからなかったのですが、妻はもう限界だったようです。イエス様に背を向け続け、家に帰ればどなってばかりの私に疲れはて、「もう何もできない」とうずくまる妻は、眠れない夜が続き、体調を崩していました。そして、いつもなら「何してるんだ、早く食事の支度をしろ」とどなる私が、なぜかおだやかな口調で「来年の一月から集会に行く」と妻に言ってしまったのです。

「行く」と約束したことを少し後悔しながら礼拝に参加した日は、集う兄弟が少なかったためか、祈りの間の沈黙が、私にはとても長く感じられました。その沈黙が、「祈りなさい、早く祈りなさい」と命じているようで、祈ってしまいました。というより主に祈らされたのです。そして、その後とても楽になったことを覚えています。

この日から私は、自分の家でも祈る者に変えられました。でも、まだイエス様を百パーセント信じているとは言えなかったのですが、そんな時、「御代田のキャンプに行かない？」と妻に誘われ、行きたいような行きたくないような中途半端な気持ちで出かけました。その夜はあるご兄姉の別荘に泊めていただきました。翌朝、主が私の心に働いてくださり、「これまでのこと、ごめんなさい。どうか主イエス様、私の心を開いて、あなたがわかるようにしてください」と祈りました。その別荘の姉妹は、「この祈り

は今日、聞き入れられます」とおっしゃいました。

それから、御代田の福音センターに出かけ、礼拝堂に入った瞬間、高い天井を見上げて、今までにない不思議な感動を覚えました。なぜか涙があふれ出て、しばらくその場に立ちつくしていました。その日の夜ベック兄と交わっていただき、ベック兄のお祈りに合わせて、「私は罪人です。どうか赦してください」と、心から祈りました。祈った後、夜の集会に参加して、礼拝堂の一番後ろの席に座りましたが、胸がいっぱいで、兄弟が語られた聖書のメッセージは耳に入ってきませんでした。翌日には洗礼を受ける恵みにあずかり、喜びとともに帰宅しました。

礼拝に集い始めてから今日まで、魚釣りには一度も出かけていません。別に魚釣りが嫌いになったわけではありません。今でも釣りは好きですし。釣竿も大事に物置に仕舞ってあります。しかし、ある兄弟から、「あの魚釣りが好きな兄弟はどこに行ったんですか?」と聞かれた時、私は「あの釣り好きの人は、もうお亡くなりになりました。実に惜しい方を亡くしました」と、笑いながら答えたことを今も覚えています。

私が主の御前で自分の罪を悔い改めて、洗礼にあずかり、今、このように礼拝を守って祈れるようになったことは、完全に一方的な主のご愛のみわざでした。

もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちにいきておられるのです。（ガラテヤ　2・20）

今日までの十七年間、主イエス様は数え切れぬほどの導きと恵みを用意してくださり、見させてくださいました。その一つが一昨年、十八年ぶりに姉と再会できたことです。それは、まさに次のみことばどおりの導きでした。

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。…引き裂くのに時があり、縫い合わせるのに時がある。黙っているのに時があり、話をするのに時がある。愛するのに時があり、憎むのに時がある。戦うのに時があり、和睦するのに時がある。

（伝道者　3・1、7〜8）

姉と私は、私が救われる約一年半前に絶縁しました。すでに主イエス様を信じていた妻が、亡くなった私の父の仏壇や墓前で焼香をせず頭を下げることもしなかったことが、きっかけでした。そんな妻の態度と信仰に、私の母、姉、兄が「そんな嫁には家に来てもらいたくない」と、私から注意するように言ってきました。短気な私は、「そんなことだけで来るな、と言うならもう来ない」と言い返して、母、姉、兄から絶縁されてしまったのです。

それ以来、十二歳上の姉とは会ってはいませんでした。六歳上の兄とは母が亡くなる前に、不思議な導きによって会うことができ、また、母と一緒に祈ることができました。母の葬儀は仏式で行われましたが、「愛する主イエス様、母を天国に召してくださってありがとうございました」と、みんなの前で祈ることができ、親族や親戚の人は、だれも非難せず、その祈りを喜んでくださいました。私たちの信仰に一番反発していた姉は、体調を崩していて、その葬儀には来ていなかったのです。

その後、姉の主人が亡くなった時、私たちは葬儀に参加する準備をしていましたが、「焼香できない者は参加しないでほしい」と姉から断られて、姉と会える機会はありませんでした。そしてなかば諦めかけていた一昨年の七月、姉が脳梗塞で倒れ、意識不明との連絡がありました。すぐに病院に行きたかったのですが、以前、葬儀の参加を姉から断られたこともあるので、見舞いに行ってよいかどうかを姉の娘に尋ねると、実は倒れる前に、弟の私に会いたい

と言っていた、ということでした。

翌日、厚木の東海大病院に妻と出かけました。病室に入ると、やせ細った姉がベッドで眠っていました。寝息だけが昔の元気な姉でした。二時間ほど病院にいましたが、目を覚ましませんでしたので、帰る前に姉の娘の了解をとって、眠っている姉の横で、これまでの主の守りに対する感謝と体の回復への願いを祈りました。そして、私と妻は帰宅することにしましたが、帰宅途中の私の心は何か割り切れない、すっきりしない気持ちでいっぱいでした。「イエス様、これが、あなたが与えてくださった十八年ぶりの姉との再会なのですか、眠ったままで会話もできない、こんな姉との再会は少しもうれしくありません、なぜですか」と訴えていました。

数日後、姉の娘から「少し意識が戻った」との連絡が入りました。私は寝たままの姉を見たくないので、行きたくない思いでしたが、妻が行こうというので、主に祈って、十日ぶりに病院へ妻と出かけました。

病室に入ると姉は幻覚症状で、病室が暗い、怖いと何かに怯えていました。姉の娘が「怖いことないよ」と優しく落ち着かせ、今、おかあさんに会いに来ている人、誰かわかる?」と尋ねると、十日前に意識がなく、少し前まで幻覚症状だった姉が、私に目を向け「わかる、わかる」とうなずき、そして、なんと、「ごめんね、ごめんね」と私に謝ったのです。

姉の目からは涙が流れていました。その光景が主の導きであると見せられた時、私は何も言えず、その場に立ちつくしていました。そして、主がここまで姉を回復させてくださったことを喜び、数分の面会でしたが主の愛とみわざに驚き、感謝して帰りました。

それから一ヵ月後、再び姉の病院に行きました。三回目の今回はほとんど意識の回復した姉が病院のベッドで、にこやかに私たちを迎えてくれました。そして突然、今度は妻に「本当にごめんなさい」と謝ったのです。再会三回目で昔の姉弟の会話を十八

年ぶりに主から与えられました。しかし、先月も姉の所に妻と出かけましたが、まだイエス様を求めるまでには至っていません。これからも姉が求めるその時まで、また娘たちの家族親族の救いのことも、私たちは祈り続けていきます。

私は当初は、「母や、姉や、兄たちと、なぜ冷静に話し合うことができなかったか」と自分の愚かさを後悔し、妻の強硬な姿勢、実家との絶縁に心を痛めていました。しかし、今それは、すべて主がなしてくださった最善である、と確信し感謝しています。末っ子の私が、実家と付き合いながら偶像礼拝を拒否し、妻と同じ信仰を持つ、ということは、絶縁の中でしかありえない、と思うからです。あの絶縁一年半後に私は救われ、この集会に導かれました。あの時、まだ主の愛を知らなかった私が、兄や姉に従っていたら、私の救いはなかったでしょうし、我が家は家庭崩壊していたはずです。

絶縁した姉との再会に十八年間かかり、私の救いも七年間かかりましたが、これは主の最善の計画でした。妻をはじめ集会の方々の祈りがあってこそ、主がなしてくださったのです。目に見えるところは決していい状況でなくても、イエス様にすべてを委ねる時に、目に見えない主のご支配なさる世界では、時空を越えて主の愛が働くのです。

「いつでも祈るべきであり、失望してはならない」
（ルカ　18・1）

藤枝和治
一九四三年十一月二十一日　東京都江東区　生まれ
江東区立弟三小学校　江東区立大島中学校　日本大学工業高等学校卒
石川島播磨重工業株式会社　同社定年退職
妻・明美　長女・さやか　次女・さおり

主に信頼するものは失望させられることがない

藤枝　明美



中央明美さん、上海にて皆さんと

胎内にいる時からになわれており、生まれる前から運ばれた者よ。あなたがたが年をとっても、わたしは同じようにする。あなたがたがしらがになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。

（イザヤ　46・3〜4）

私は終戦翌年の一九四六年、佐賀で生まれました。父は無線技術者として韓国で働いていて、私を身ごもっていた母だけが先に帰国して、私を産みました。父は病気になって帰って来ましたので、母は病気の父と、乳飲み子の私を養うために、けんめいに働きました。また、祖父母との同居の問題、後に生まれた弟の育児など、無理がたたって子宮全摘の手術を受け、ホルモンのバランスを崩して、二十六歳で更年期症状になりました。もともと感情的な母は、さらに感情の起伏が激しくなって、私を折檻するようになりました。今でいう虐待です。

子どもにとって母親は、この世で一番自分を愛してほしい存在です。その母が一番恐ろしい人でもあるという矛盾が、幼い頃から心の中にありました。人間関係の基盤となる母との関係が、こんなありさまでしたから、学校でも友だちと遊ぶことができず、いじめられました。当時、田舎には「引き揚げ者」への差別もあって、楽しい所はどこにもない子ども時代でした。何のために生きているのかわからず、中高生の頃は「死」ばかりを考えていました。母も私も心が病んでいた、と思います。そんな私が結婚し、二人の娘を育てましたので、主人や娘たちはどんなにか大変だったろうと今では思っています。

私は救いを求めて近くの教会へ行きました。聖書を読めば読むほど、聖書の中に「救い」があることはわかるのですが、教会では救いが得られず、また、洗礼を受ければ救われるのではないかと思って洗礼

も受けましたが、それでも苦しさは変わらず、戸を叩き続けていました。あるクリスチャンカウンセラーの奥様が、救いのことがよくわかる本があります、と「実を結ぶ命」を紹介してくださいました。

初めて集会に集った時に、「ここには本物がある」とすぐにわかりました。わかったというより、わからせていただきました。それは交わりの中で語られる言葉の一つ一つに、聖書のみことばの裏付けが見えたからでした。それはまるで、みことばが飛び交っているようでした。私は求めて聖書を読んでいるうちに、みことばは「本の中の字面」ではなく「生きて働くものであること」を知らされました。

ベック兄に交わっていただいた時に、私の話を黙って聞いてくださった後、一言、「お母さんを自分で選んだの?」とおっしゃいました。私は「自分で選べるならこんな理不尽な思いはしません」と思ったのですが、この「お母さんを自分で選んだの?」の一言は最初は小さな光でしたが、のちに大きな光となり、今では、あらゆる問題の解決の土台となりました。

私たち人間は、両親はもちろん、自分自身が男女のどちらに生まれるかとか、生きる時代や、生まれる国も、人種も決められません。また、自分の容姿や、性格気質、才能能力、環境など、自分の存在に関わるすべてのことにおいて、何一つ自分では選べませんでした。それにも関らずこの自分をもって、「一生努力し頑張って、自己実現して完成させなさい!」とこの世は言うのです。そして、苦しみ頑張って人生を歩んだ後に、「死」で終わって消えていくという一生。……しかも、終わる時もいつ、どこで、どのようにして死ぬかも自分では決められない。なぜこんな人生を歩まねばならないのだろう。なぜ存在しているのだろう。「私の、この不条理さと理不尽さの人生に、解決はないのか?」と、まとわりつく自分の人生の問題に悩んでいました。

私は「自我というカプセル」の中で生活していて、私の「創造者」をまったく知らなかったのです。二十数年前に、「被害者意識と自己憐憫」の塊りである「私」のためにイエス様が十字架に架かって死んでくださったことを、信じて闇から光へと移していただきました。ことばでは言えない喜びと平安に涙があふれました。また、聖書を読んでいる時に、ヨハネ19章30節の「完了した」というあのイエス様のみことばを、主が私の内側で語ってくださいました。それは小さな声でしたが、私の全存在となりました。

主は「わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。」(イザヤ　43・7)というみことばで私の創造の目的を示してくださいました。そして、「神の国とその義とをまず第一に求めなさい」、「互いに愛し合いなさい」、「十字架を負って私について来なさい」という命令もくださいました。

これまでの二十数年間の信仰生活は楽しい散歩道ではありませんでしたが、「彼(主)に信頼する者は、決して失望させられることがない。」(1ペテロ　2・6)のみことばのとおりでした。また他のみことばのすべても、真実であることを知る毎日で、暗い子ども時代には想像することもできないような光の中の生活でした。

そして、私自身は「私は愛されて育たなかったので、子どもを愛して育てることができない」とばかり思っていましたが、この集会に来てから、ある姉妹が「両親や周りから愛情を一身に受けて育ったので、自分しか愛せない」と証しておられるのを聞いて、「ああ人間はどのように育っても自分しか愛せない者だ」と知りました。

あらゆることにおいて、「人間は自己中心の罪人である」と知らされる時、改めて主の救いの偉大さ

藤枝明美

を思うとともに、この母を与えられたことに感謝せざるを得ません。

私は一昨年末から始まった「祈りの輪」の早朝の輪の部分を担当させていただいています。もちろん、続けていくには、いろいろと問題はあります。けれども、続けることによって、みことばを読み祈ることでいただく祝福は、体験した人だけが知ることのできる恵みです。思いもよらないことがたくさん起こりましたが、主は、すべての問題を必要があって起こされることを知りました。ですから、自分はどこに立つかを探られます。また、自分の考えや、自分の思い、自分の立場を堅持する時には足を踏み外し、肉の思いで何かを知りたい、わかりたいと思った時は、迷いの中に入り込むことを知らせていただきました。

これからも、どのような問題が起こるかわかりませんが、どんなことがあっても、「見えるところを見ないで、主だけを見て従っていく」ことの大切さを思います。今という時は、勝利への道の通過点に過ぎない、すべては主の栄光のうちに完了している、と信じますから感謝です。

あなたの夫はあなたを造った者、その名は万軍の主。あなたの贖い主は、イスラエルの聖なる方で、全地の神と呼ばれている。（イザヤ　54・5）

門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王がはいって来られる。栄光の王とは、だれか。強く、力ある主。戦いに力ある主。門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王がはいって来られる。その栄光の王とはだれか。万軍の主。これぞ、栄光の王。（詩篇　24・7〜10）

あなたの天幕の場所を広げ、あなたの住まいの幕を惜しみなく張り伸ばし、綱を長くし、鉄のくいを強固にせよ。（イザヤ　54・2）

藤枝明美
佐賀市生まれ。佐賀市立兵庫小学校、熊本市立出水中学校、熊本県立第一高校卒。夫・和治、長女・さやか、次女・さおり。



ありのままの私を主は愛してくださいます

三浦 愛子



後列左から愛子さん、お母さま（土坂朝子さん）、ご主人（敬さん）、長女（真衣ちゃん）。
前列左からお父さま（土坂正明さん）、お祖母さま（土坂酉子さん）、次女（直ちゃん）。

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。…わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」（イザヤ 43・1〜2、4）

わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖ったからだ。（イザヤ 44・22）

私は、父・土坂正明、母・土坂朝子の三人姉妹の長女として生まれました。母は父との問題で先に救われていました。近くの教会に行くことを勧められ通ってはいましたが、なにもわからず聞く耳もない状態でした。

中学一年生のある日、突然学校に行けなくなりました。ひどい吐き気とわけのわからない不安感からでした。やせほそり、自分で自分をコントロールできず、ただただ、苦しくて、つらくて涙があふれ出てきました。まわりの心配してくれる人たちは「頑張って！」と言いました。でも、これまでも、このときも、自分なりに頑張ってきたつもりだったので、もう頑張ることはできない、自分ではどうしようもできない、と自分自身に絶望し、将来になんの希望も持てず、色々な思い煩いから、心身ともに疲れ果てていました。

そして、初めて心から、「神様、助けてください」と祈りました。そして聖書を開くと、次のみことばが目にとまりました。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ 11・28）

それからは、聖書のみことばが次々に生きて飛び込んでくるようになり、今までの悲しみの涙は除かれ、神様が私に語ってくださっている、というなんとも不思議な気持ちで感謝の涙がとまりませんでした。

聖書のことばには力がある、そして、主、イエス・キリストは真理であり、平安と希望を与えてくださるのだと体験的に知ることができました。

現在も、突然、不安にかられる性質は残っています。パニック障害という病だそうですが、何気ない日常生活のなかで、突然襲ってくる動悸、息切れ、めまい、吐き気、それに伴い、恐怖が襲ってきて、その場で、動けなくなるのではないかと思うのです。外出したときに、また発作がおきるのではないかという

不安から、一人で出かけることができません。

ある日の朝、主にこう祈りました。「主よ。今日一日もどうぞお導きください。助けてください」と、祈った矢先に、パニックの症状が出て、苦しくなります。そうなると、私の祈りは主に届いていないのではないだろうか、私の信仰が弱いから、信頼が足りないからと信仰にその原因を探しだします。これがサタンの私に対する巧妙なわなです。信仰と、病気をごちゃ混ぜにさせるのです。私は朝、導いてくださいと祈って、そして自分の思いとは違う、自分にとっては苦しい一日でも、主が与えてくださった一日で、主が許してくださった一日です。また、恵みを備えてくださっています。そして、主は私の相談相手であって、なんでもことばにならない思いでさえも十分にわかってくださっているからです。

私には、根深い罪があります。このパニック障害さえなければ、まわりの人にも迷惑をかけず、もっと自分が望む良い人生が送れるのではないかと思うことです。

しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。」と言えるでしょうか。

（ローマ　9・20）

これまでの歩みを振り返ると、苦しい中を通らされますが、すべてのケースで恵みに行きつく、という体験をさせていただきました。主と出会えたこと、その後の就職、結婚、夫婦の問題、出産、子育て、すべてにおいて主のご計画は最善です。とくに昨年夏、パニックの強い症状が出たときも、主は夫婦を練り、心から一緒に祈れるように変えてくださり、日常生活に深く主が働きかけてくださっていることを気づかせていただきました。そして、皆様方のお交わり、祈りが本当に強い支えとなることも、いまさらながら教わりました。この性質をお与えになったのも神様ですので、いつも神様はなんて言ってくださっているかというところに戻れると、たくさんの慰め、はげまし、そしてなんともいえない平安につつまれます。

このパニック障害があるからこそ、今も、いつも、主に担われていると感じることは事実です。そしてなんら自分自身が変わったとか、なにかしたとか、そういうことはなく、ありのままの自分を、主は愛してくださり、一方的に救ってくださいました。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。（詩篇　119・71）

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。

（イザヤ　63・9）

今の生活は愛する夫、敬兄弟と四歳と零歳の娘との四人家族で、一日一日主に導いていただきながら、泣いたり、笑ったり、怒ったり、許せたり、なかなか許せなかったり、皆で家族や友人の救い、そして、子どもたちが直接主と出会い、恐れ、喜びながら歩めますよう祈りつつ、主のご再臨を待ち望んで過ごしています。私の望んだものとは違う形でしたが、すべてを満たし、豊かに与えてくださった主に感謝しています。

あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。

（詩篇　119・105）

三浦愛子
一九七九年五月二十五日生まれ。新宿区立牛込第一中学校、東京都立新宿高校、東京都歯科医師会付属歯科衛生士専門学校卒。夫・敬、長女・真衣、次女・直

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会

	10:00 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15　〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33　〒389−0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ



ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。

なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）



ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

絶えず祈れ（上・下巻）



ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180－0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4－9－11　吉祥寺キリスト集会



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと－ヨハネの黙示録（第1～4巻）

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。

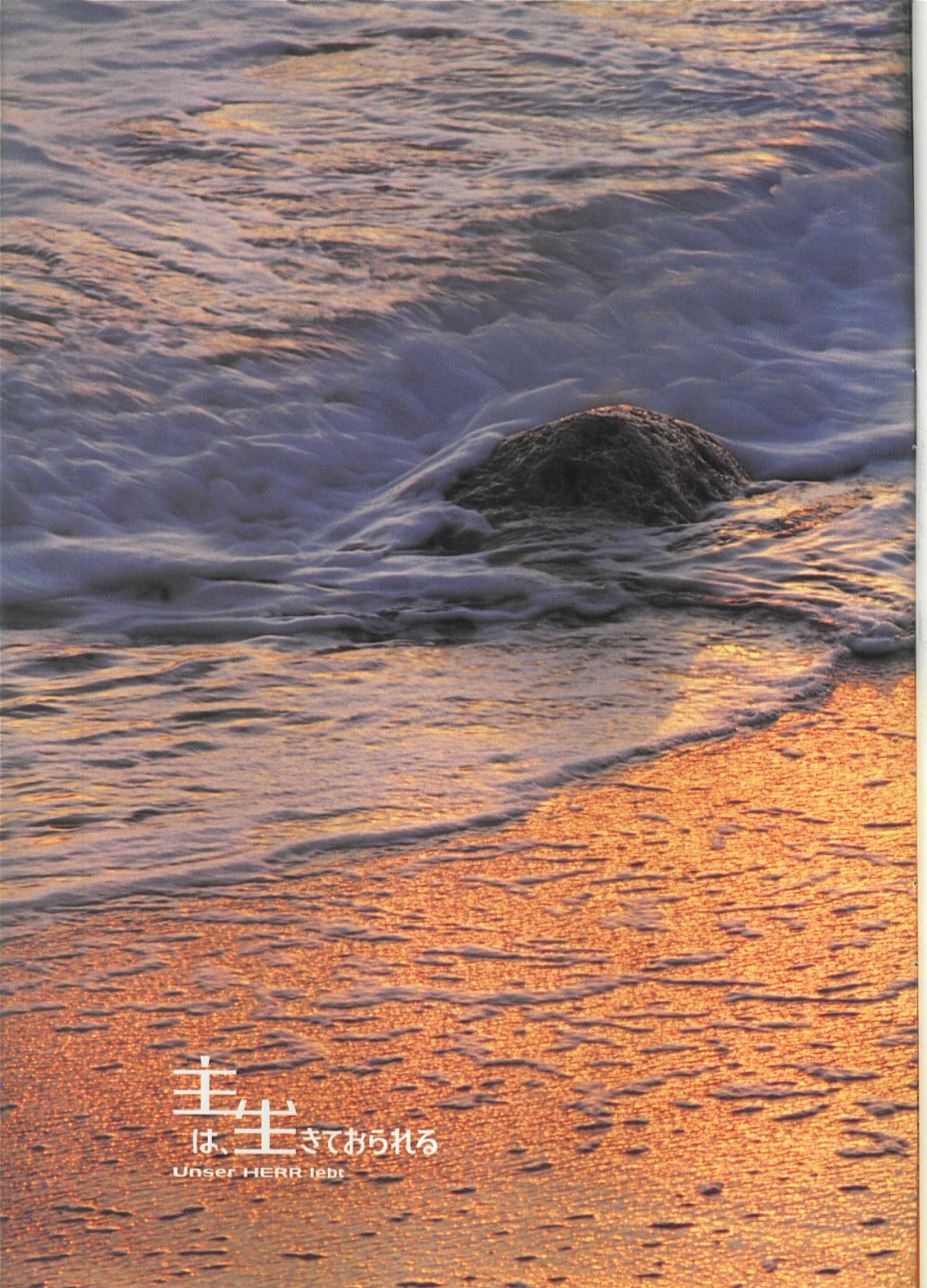


光よあれ －私たちは主のもの

証しシリーズ（第1～9集）

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

※主のご再臨が近づくいま、すべての本を送料のみで配付しています。
お気軽にお申し込みください。



Unser HERR lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる　第22号

定価100円（本体95円）　2011年10月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
イラスト	向井則博
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。